

岡豊城跡発掘調査概報

—第1～3次調査概要報告書—



1988年3月

高知県教育委員会



詰(A区)石敷造構(SX1)



詰下段(G区) SB3



染付



刻銘瓦

序

岡豊城跡は、長宗我部氏の居城として著名であり、県内の中世城跡の中では最大の規模をもつ代表的な城跡の一つであります。山頂の詰からの眺望は高知平野を一望に認め、また、南は黒潮洗う太平洋を遠望出来る絶好の場所に立地しています。城跡の存在は古くから知られており、過去には公園として地元の方々ばかりではなく、多くの人々に親しまれていました。しかし、城跡としての具体的な内容については不明な点が多く、その全容は多くの謎に包まれていました。

今回、高知県では歴史民族資料館の建設が具体化し、その建設地として岡豊城跡の位置する岡豊山が選定されることになりました。これに伴い岡豊城跡を歴史公園として整備し、歴史民族資料館と一体化した歴史教育の場として活用する基本構想が生まれました。そこで、岡豊城跡の姿を解明し、整備の基礎資料を得るための発掘調査を実施することとなりました。

昭和60年度から開始された3ヶ年に及ぶ調査の結果、当初の予想を上回る遺構、遺物の発見が相次ぎ、往時の姿を彷彿させ得る貴重な成果を上げることができました。調査はさらに継続されますが、今回、過去3ヶ年における調査結果をまとめ概要報告として刊行することになりました。本書が今後の中世城跡の研究に止まらず地方史研究にも役立ち、さらに岡豊城跡が歴史公園として整備されることにより、より一層文化財への理解を深め、その保存・保護を進める上での一助になれば誠に幸甚なことだと思います。

最後になりましたが、調査においてご指導、ご協力をいただきました関係各位の皆様に心から深く感謝の意を表します。

昭和63年3月31日

高知県教育委員会

教育長 中澤秀夫

例　　言

1. 本書は、高知県教育委員会が国庫補助を受けて実施している県指定史跡「岡豊城跡」の第1～3次調査の発掘調査概要報告書である。

2. 調査は昭和60～62年度にかけて行われており、さらに昭和63・64年度（第4・5次調査）の発掘調査が予定されている。

3. 調査にあたっては、次の調査員が各調査を担当した。

第1次調査（昭和60年度）

担当調査員 松田直則（高知県教育委員会文化振興課上事）

調査員 高橋啓明（　　〃　　〃　社会教育上事）

〃　角谷和男（　　〃　　〃　主事）昭和61年4月転出

第2次調査（昭和61年度）

担当調査員 森田尚宏（　　〃　　〃　主事）

調査員 高橋啓明（　　〃　　〃　社会教育上事）

第3次調査（昭和62年度）

担当調査員 森田尚宏（　　〃　　〃　主事）

なお、庶務は第1～3次調査ともに楠顕陽介（高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班長）があたった。

4. 第1～3次調査においては、調査顧問を岡本健児氏（高松短期大学教授）にお願いし、ご指導をいただいた。記して感謝する次第である。

5. 本書の執筆は、I, III, IV, V-1を森田が、II, V, VI-2を松田が分担し、編集は松田、森田が協議によりまとめた。

6. 調査区は第1次調査の詰から順次A～M区と呼称した。また、遺構番号は第1～3次調査をまとめ概報用として便宜的に使用した。

7. 第4図は、南国市教育委員会所有の原図を使用して作成した。

8. 調査にあたっては、地元八幡地区をはじめとして多くの方々にご協力をいただき、また、南国市教育委員会には測量図等の資料においてもご援助いただいた。記して感謝する次第である。

9. 出上遺物は高知県教育委員会において保管している。

本文目次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	9
1 調査方法	9
2 第1次調査	9
3 第2次調査	11
4 第3次調査	11
IV 遺構	13
1 結	13
2 結下段	16
3 二ノ段	20
4 三ノ段	23
5 井戸・掘切	23
V 出土遺物	26
1 土師質土器	26
2 輸入陶磁器	27
3 国内産陶器	28
4 瓦質土器	28
5 上製品	28
6 瓦類	29
7 石製品	29
8 渡来鏡	29
9 その他の遺物	29
VI 総括	31
1 遺構について	31
2 出土遺物について	33

挿 図 目 次

- 第1図 岡豊城跡の位置と周辺遺跡分布図
第2図 岡豊城跡地形図
第3図 岡豊城跡現況図
第4図 岡豊城跡西斜面堅堀測量図
第5図 調査区設定図
第6図 詰（A・D・E・F区）遺構平面図
第7図 詰（H・I区）遺構平面図
第8図 詰（A・F区）セクション図
第9図 詰下段（G区）遺構平面図
第10図 二ノ段（C区），三ノ段（K区）セクション図
第11図 井戸・堀切（M区）遺構平面図
第12図 井戸北トレンチセクション図
第13図 出土遺物実測図1
第14図 " 2
第15図 " 3
第16図 " 4
第17図 " 5
第18図 " 6

表 目 次

- 第1表 土師質十器法量表
第2表 出土遺物法量表1～5

図版目次

- 図版1 岡豊城跡航空写真
図版2 岡豊城跡遠景（南より）
図版3 諸（A区）調査前全景（北より）
図版4 諸（A区）全景（北東より）
図版5 諸（A区）SX1, 切石（西より）
図版6 諸（A区）刻銘瓦出土状態
図版7 諸（B区）全景（南西より）
図版8 ニノ段（C区）全景（西より）
図版9 諸（D区）調査前全景（南西より）
図版10 諸（E区）全景（北より）
図版11 諸（F区）全景（北西より）
図版12 諸下段（G区）SB3検出状態
図版13 諸下段（G区）SB3東辺礫石
図版14 諸下段（G区）SK2（南西より）
図版15 諸（H区）調査前全景（北西より）
図版16 諸（II区）SK1（南東より）
図版17 諸（H区）SD2, 石列（北西より）
図版18 諸（II区）SD2遺物出土状態
図版19 諸（I区）SD1（東より）
図版20 三ノ段（K・L区）調査前全景（北東より） 三ノ段（K区）上面全景（北東より）
図版21 三ノ段（L区）上面全景（南西より） 三ノ段（K区）下層割石検出状態（南西より）
図版22 三ノ段（K区）全景（南西より） 三ノ段（K区）遺物出土状態
図版23 剥切（M区）調査前全景（北より） 剥切（M区）下部調査前全景（北東より）
図版24 剥切（M区）下部全景（北東より） 剥切（M区）下部全景（南東より）
図版25 剥切（M区）下部岩盤整形面 剥切（M区）下部盛土セクション
図版26 井戸（M区）全景（北東より） 井戸（M区）北壁
図版27 北部剥切（東より） 四ノ段南部（北西より）
図版28 土師質土器
図版29 上師質土器
図版30 上師質土器（37～41）、青磁（42）、羽口（86）、瓦類（106・108～110）
図版31 染付（表） 染付（裏）
図版32 青磁 染付（69～71）、天目茶碗（72）、白磁（53）、瓦質土器（84・85）

図版33 備前焼

図版34 備前焼（表） 備前焼（裏）

図版35 瓦賴 土鍤

図版36 金銅仏（113），土師賣土器（114），臼（115・116），硯（112），渡来錢（117～128）

I 調査に至る経過

岡豊城跡は長宗我部氏の居城として著名な中世城跡であり、その規模は県内でも最大級を誇り、高知県を代表する城跡として昭和30年2月15日付けで県指定史跡となっている。岡豊城跡は標高97mを測る岡豊山に立地しており、山頂部からの展望は広く高知平野へと開けている。

岡豊城跡の現況をみれば、山頂部に位置する詰を中心とした二ノ段、三ノ段、四ノ段からなる主郭部は、過去に公園化されており、植樹、遊歩道の整備等により手が加えられているが、比較的良好な状態で残されていると考えられた。また、主郭部周辺の斜面には土塁、堅掘等の遺構をみることができる。さらに主郭部の西方には鞍部を隔てて、標高68mを測る副郭部が存在しており、昭和45年12月16日付けで、「岡豊城伝廐跡曲輪」として南国市指定史跡となっている。主郭部の南斜面にも標高40m前後を測る突出した平坦部の存在が知られており、「家老屋敷」と呼ばれる事からみても、副郭的な存在と思われる。現在のところ、このように詰を中心とする主郭部と2ヶ所の副郭部を有する連立式の構造の中世城跡とみることができる。

岡豊城跡については、現地形の観察を中心とする研究も行われているが、文献資料も皆無に近く、具体的な内容についてはほとんど解明されていないのが現状である。しかしながら、今回歴史民族資料館の建設計画が契機となり、発掘調査が実施されることとなった。歴史民族資料館の設置については以前から構想が練られていたが、近年、建設地の検討が行われ、岡豊山に決定された。そして岡豊城跡を歴史公園として整備し、歴史民族資料館とともに活用すべく計画が立案された。これを受けて、岡豊城跡の基礎資料を得ることにより、城跡の保存と整備を進めるために昭和60年度から国庫補助を得ての発掘調査が開始されることになった。

調査は、当初3ヶ年計画で開始されたが、検出された遺構の状態が良好であり、また注目される遺構の発見等もあり、さらに2ヶ年の延長を行い、昭和64年度までとした。そして今回は第1～3次調査の概要をここにまとめることとなった。



岡豊城跡詰からの眺望(南方)

II 遺跡の位置と歴史的環境

岡豊城跡は、県都である高知市の東部、南国市に位置する。南国市周辺の平野部は、香長平野と呼ばれ、物部川の恵みを受けた本県最大の穀倉地帯として有名である。香長平野は、県下でも遺跡の宝庫として知られており、物部川下流域には田村遺跡群が、また北部の国分川流域には、土佐國分寺跡をはじめとして土佐國分寺跡等の遺跡が所在する。

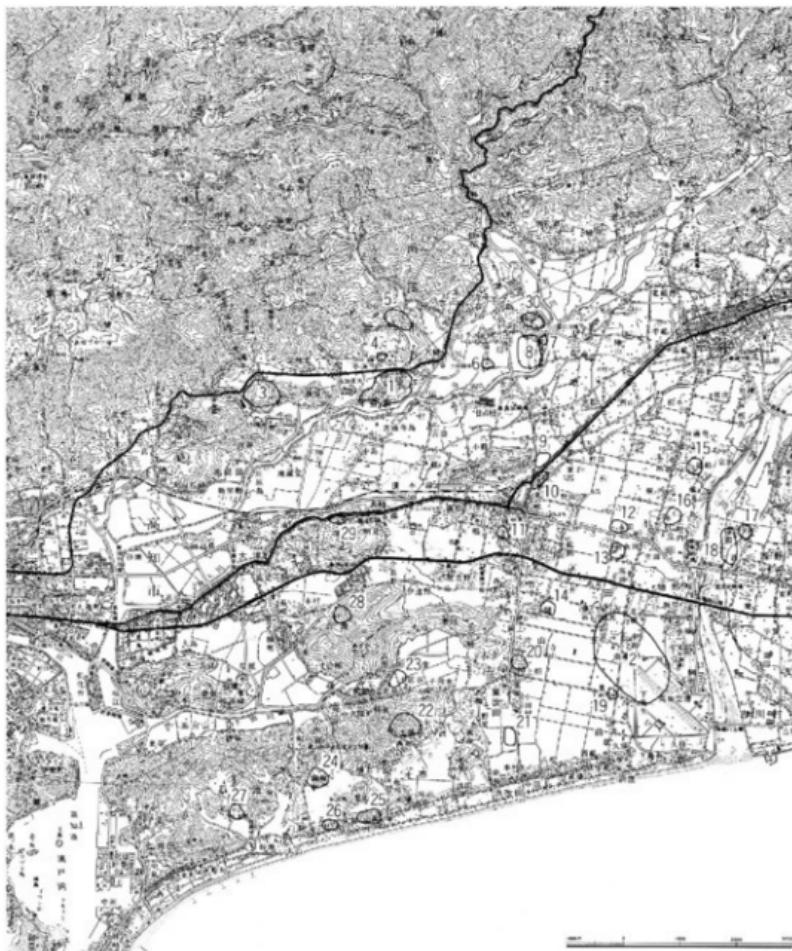
岡豊城跡は、高知市街地から国道32号線を東進し、南国市との境界である逢坂峠を越え、さらに東へ走った位置に南側へ突出した独立丘陵である岡豊山に立地する。城跡からは、南方に香長平野、西方には高知市街地を一望でき、絶好の眺望をもつ。また南面する急斜面を下ると四国山地南麓の水を集め浦戸舟に注ぐ国分川が自然の要害として流れしており、山城の立地としては最適の条件を備えている。

歴史的環境をみれば、南国市周辺の縄文時代の遺跡として岡豊町定林寺発エ田遺跡、田村遺跡群のLoc. 47等、後期前半から中葉にかけての遺跡が発見されている。晚期の遺跡は発見されていないが、断片的に遺物が認められることから、田村遺跡群の弥生前期初頭に先行する時期の集落遺跡が田村周辺で検出される可能性が強い。弥生時代になると田村遺跡群を中心に多くの遺跡が発見されている。前期初頭の集落は、その北方300mに位置する前期前半の環濠集落である西見当遺跡へ移動しており、集落構造に大きな変化をみることができる。前期後半には、田村遺跡群を母村とする集落から分村が行われたと考えられ、香長平野一帯に遺跡が拡散する。弥生時代中期では、朝鮮系無文土器が発見された田村遺跡群がやはり注目され、中期後半になると岡豊町窓間古墳の墳丘下で検出された高地性集落遺跡も存在する。弥生時代後期では、田村遺跡群で後漢鏡や集落の発見があるが、全般的な遺跡の分布は香長平野北部の土佐山田町を中心とする低位台地に移っている。

古墳時代においても香長平野北部が中心であり、岡豊城跡の背後の丘陵には舟岩古墳群や小蓮古墳が形成され、岡豊城跡自体にも古墳が存在していた。その後、奈良～平安時代を通じて、南国市比江地域を中心とする地域が土佐國の政治、文化の中心となり、比江廃寺、土佐國分寺が創建され、土佐國府が形成される。平安時代末から鎌倉時代においても、この地域がその中心であったことに大きな変化はないものとみられる。

南北朝から室町時代にかけて、守護代として入国した細川頼益が田庄村に居館を構え、細川氏による守護領国制が土佐においても展開される。ここで再び田村地域が土佐の中心地的存在となる。以後、細川氏は在地土豪の被官化を進め、勢力を大きく拡張した。長宗我部氏も細川氏の被官としてその力を貯え、夢窓疎石の創建になる吸江庵の寺奉行になるなど、勢力を拡大していった。しかし、応仁・文明の乱を契機に細川氏の支配力も後退し、永正4（1507）年に土佐から帰京するにおよんで、長宗我部氏の勢力も一時衰退し、土佐も戦国時代に突入する。

長宗我部氏は土佐に入国以来、宗我部郷を本拠としており、岡豊城跡も支配下にあることから



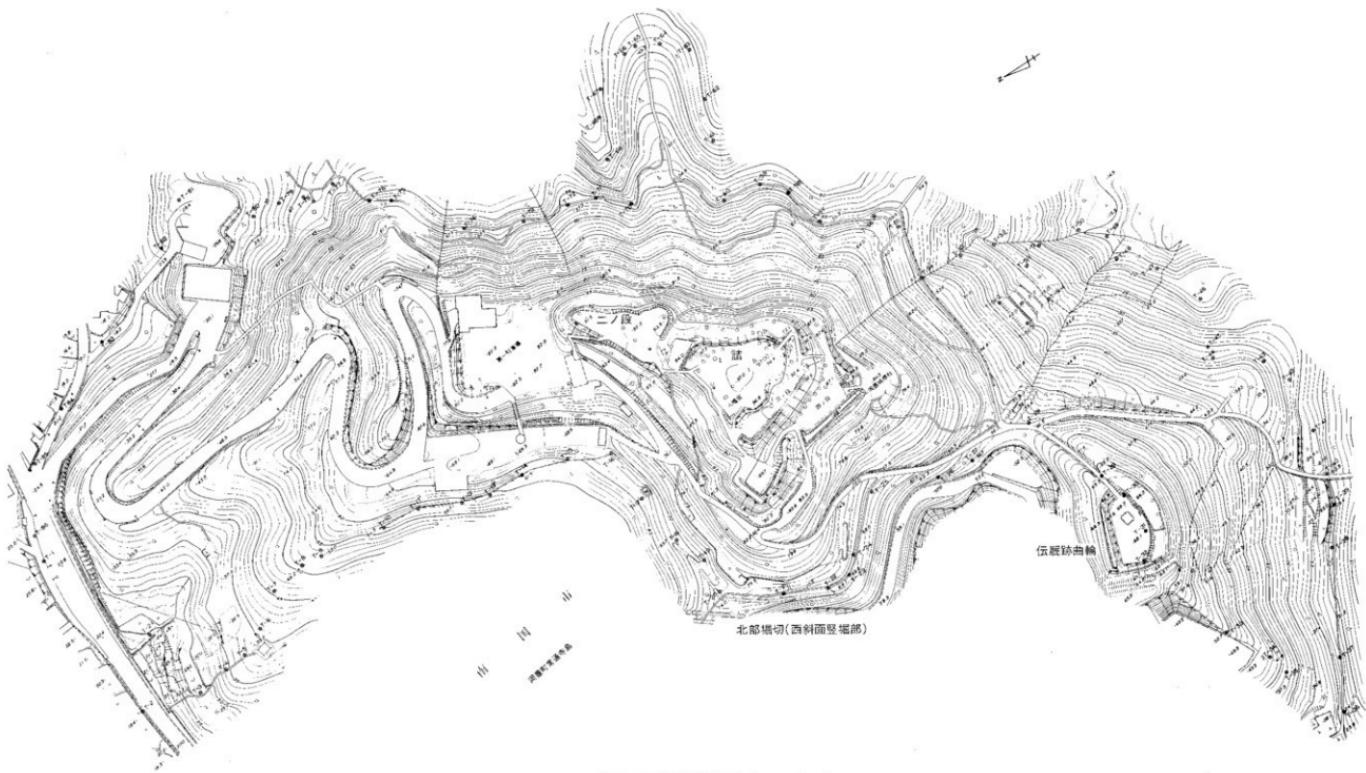
No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	岡豊城跡	中世	11	大脇遺跡	弥生	21	蚊屋出土居城跡	中世
2	田村遺跡群	縄文-近世	12	立田平杭遺跡	弥生	22	鮑森城跡	中世
3	蒲山古墳群	古墳	13	田村上郷工船遺跡	弥生	23	下田上居城跡	中世
4	小池古墳	古墳	14	大塙開町田遺跡	弥生	24	錦城遺跡	弥生
5	舟岩古墳群	古墳	15	岩村上居城跡	中世	25	栗山城跡	中世
6	土佐国分寺跡	古代	16	立田上居城跡	中世	26	細川土居城跡	中世
7	比江庵寺塔跡	古代	17	深瀬城跡	中世	27	長崎遺跡	弥生
8	土佐国府跡	古代	18	深瀬遺跡	弥生-中世	28	花熊城跡	中世
9	五軒屋敷遺跡	弥生	19	千屋城跡	中世	29	大津城跡	中世
10	農業高校遺跡	古墳	20	片山上居城跡	中世	30	比江山城跡	中世

第1図 岡豊城跡の位置と周辺遺跡分布図

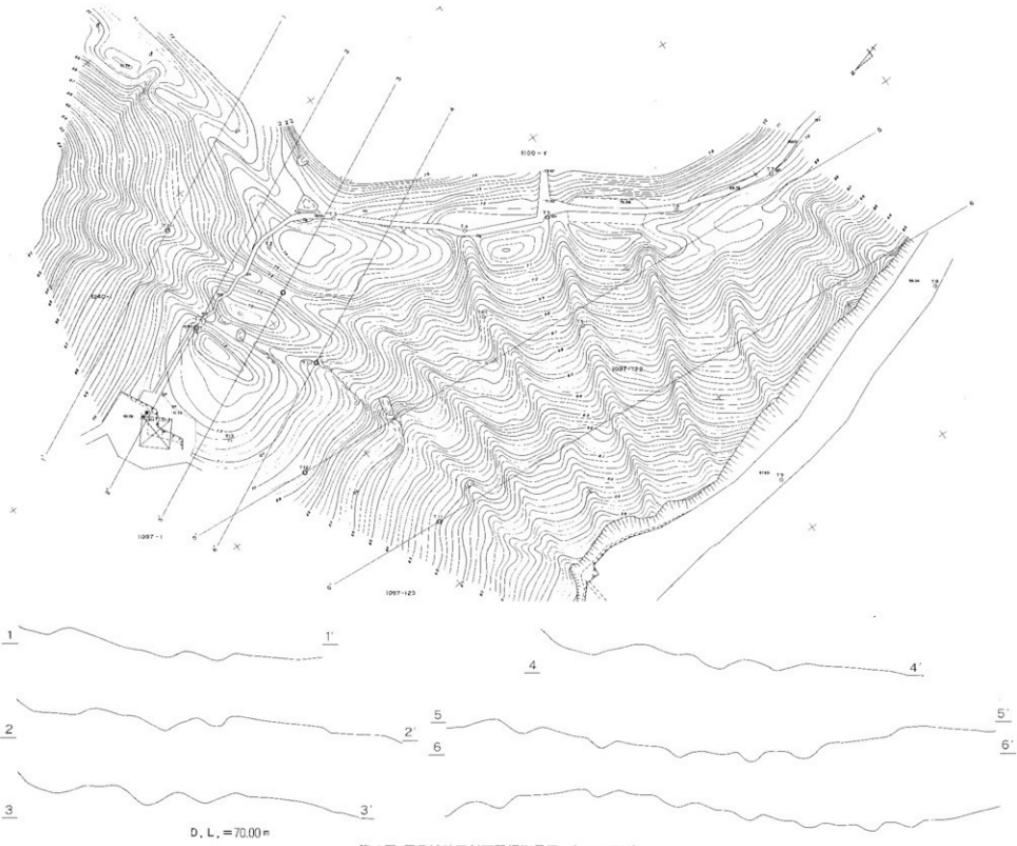
みれば、古くから居城として使用されていたと思われる。この岡豊城周辺が注目されるのは長宗我部20代国親の時期からである。19代兼序の代には、細川氏の退去に伴い、周辺の本山・山田・吉良・大平氏等の有力国人の攻撃を受け、永正5～6（1508～1509）年に岡豊城は落城することとなる。しかし、兼序の子国親は幡多の一条氏のもとに逃れ、その後一条氏の救済もあり永正13（1516）年前後に岡豊城は再興され、次代元親によって天正3（1575）年に土佐国の統一がなされる。さらに天正13（1585）年には四国を制覇するが、同年豊臣秀吉による四国征討が行われ、土佐一国の所領を安堵されている。なお、天正16（1588）年には近世城郭とそれを囲む城下町形成のために居城を大高坂城へ移しており、ここに岡豊城はその役目を終えることになる。いわば岡豊城は国親の再興から大高坂城移転に至る70～80年間において、長宗我部氏の居城として、土佐の政治、経済、文化の動力源として把握出来るのではなかろうか。



第2図 岡豊城跡地形図 ($S=1/8,000$)



第3図 岡豊城跡現況図 (S=1/2,000)



第4図 岡豊城跡西斜面整備測量図 (S=1/500)

III 調査の概要

1 調査方法

岡豊城跡の発掘調査にあたっては、遺構の遺存状態と城跡の構造解明の手掛りとなる遺構検出を目的とするために、グリッドを基準とするトレンチによる調査を行うこととした。昭和60年度の調査開始時においては、詰を含めた全域が雜木林に覆われており、地形の把握さえ困難な状態であったため伐採から行わなければならなかった。伐採後、現地で現状を把握後グリッド設定を行った。山頂部の詰中心部には三角点が設置されており、この三角点を原点として真北から東へ50°振った、詰から二ノ段の先端部を通るラインを基準としてグリッドを展開した。グリッドは、100m, 20m, 4mの3種類により、100mグリッドは南北をA…とアルファベット、東西は1…とアラビア数字によって北西コーナーを基準として表示し、以下20mグリッドは左上から右下へ1～25、4mグリッドも同様に1～25の番号により表示した。そして、三角点をE 5-1-1として各グリッドの呼称を決定した。また、高さは三角点の水準高97mを基準として使用した。

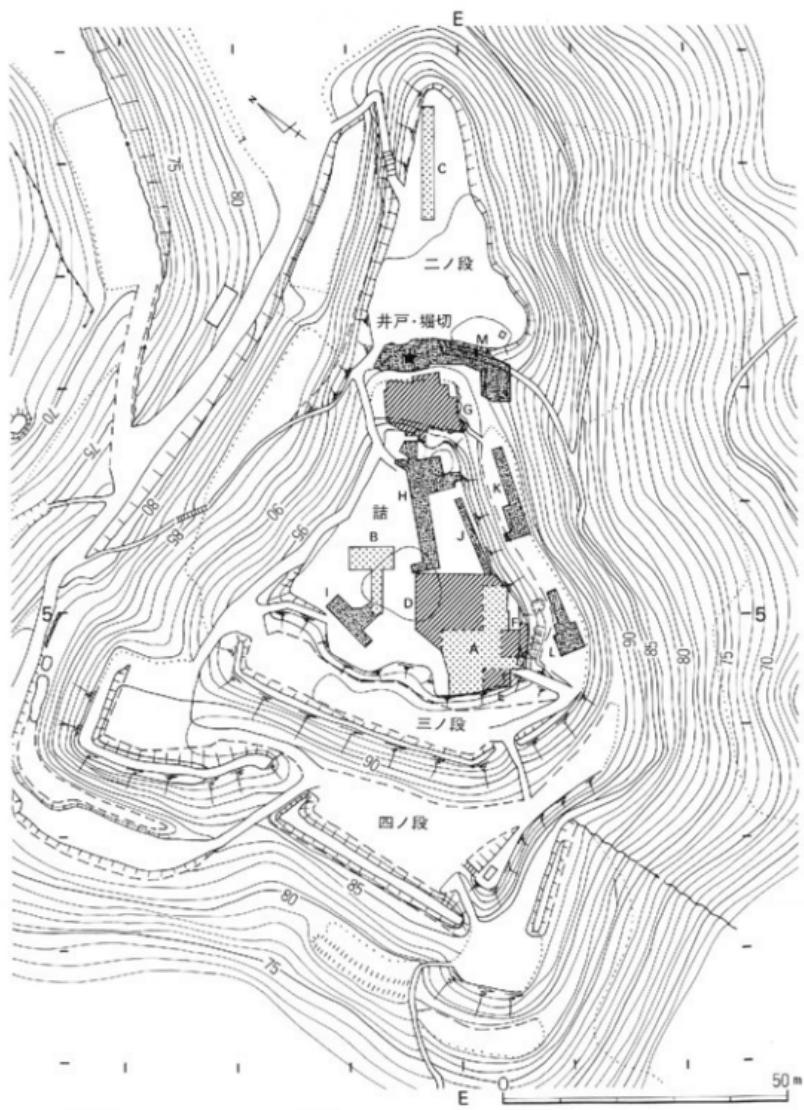
発掘調査は、第1次調査では詰西部及び二ノ段、第2次調査では詰西部及び詰下段、第3次調査では詰東部、三ノ段及び井戸・堀切を対象とした。第1・第2次調査はグリッドを基準として調査区を設定したが、第3次調査では地形的な制約もあり、任意のトレンチを設定し調査を行った。

2 第1次調査

第1次調査は初年度でもあり、遺構の残存状態を探るために詰と二ノ段に調査区を設定した。詰の地形は北東に延びる尾根上に広がる三角形を呈しており、西半部が広いことから遺構の存在する可能性が高く、三角点の南西部及び北部に4m幅のトレンチを設定し、調査を開始した。

北部のトレンチ（B区）では、表土直下に蛇紋岩の岩盤が表れており、岩盤上には礎石ではないかとみられる扁平礎が検出されたので西へ幅2mのトレンチで拡張したが、続く礎石は発見されず、移動しているものと考えられた。南西部のトレンチ（A区）は、西端部の土壌にかけてL字状に設定し、調査を進めた。表土下には遺物包含層である茶褐色粘質土がみられ、多量の土師質土器を出土した。さらに、トレンチの中央部では石敷、土壙上に切石が検出され、良好な遺構の存在が確実となったので、石敷を追求するために調査区を拡張した。その結果、真北に対しほぼ東西方向に延びる石敷遺構の全貌を確認し、その西端部には切石がみられ、土壙上の切石と同じ高さでもあり関連性をもつものと考えられた。石敷遺構の北西部には、土師質土器と多量の渡米銭を埋納したピット（P 1）が検出されており注目された。出土遺物としては多量の土師質土器とともに輸入陶磁器・佛前焼・瓦等がみられ、中でも石敷遺構西端部の切石脇からは天正三年在銘の瓦が出土した。

二ノ段は詰と堀切で隔された尾根上に延びる細長い三角形を呈しており、長軸方向の基準ライ



第5図 調査区設定図 ($S = 1/1,000$)

ンにそって $2 \times 20\text{m}$ のトレンチ（C区）を設定した。調査の結果、遺構は検出されなかったが、堆積土は厚く、地表面から地山まで $1.0 \sim 1.4\text{m}$ を測った。さらに、層序中には、焼土と多量の炭化物及び土師質上器、瓦片等を含む土層が認められ、19代兼序の時期における落城に関連するのではないかと推測された。また、詰の東には、 3 m ほど低く堀切に面した平坦部（詰下段）が存在しており、その南端部にトレンチを設定し調査した結果、礎石を確認したが、調査期間等もあり、次年度以降へ調査課題として残された。なお、A区の南西部において明確な遺構としては把握できなかったが、シミ状の落ち込みが存在しており、弥生中期の土器片を出土するところから、岡豊山には岡豊城跡に先行する弥生時代中期の高地性集落遺跡の存在が考えられる。

調査期間は昭和60年11月14日から昭和61年1月9日であり、調査面積は 270m^2 である。

3 第2次調査

第2次調査は、第1次調査で検出された石敷遺構の北に位置する建物跡の全貌を明らかにすべく北を拡張する調査区（D区）と十星の残存状態を確認するために西（E区）と南（F区）を拡張する調査区を詰において設定した。また、詰下段では、礎石による建物跡を確認するために全面を調査区（G区）として調査を開始した。

詰のD区では、石敷遺構の北に広がる礎石群が検出され、 $4 \times 5\text{ m}$ の建物跡を確認した。また、P2・3では上師質上器の杯が数枚集中して出土した。E区では、上累の残存状態を確認するとともに根石とみられる石列を検出した。F区においても、やはり土累の残存状態を確認した。F区のセクションからみると、岩盤までは 80cm と深く、その間に粘質土による版築状の堆積土が存在しており、岩盤の低くなる南半部には盛土を行っているようである。出土遺物は土師質土器が大半を占めており、包含層の厚い南半部から出土している。

詰下段では、全面に広がる礎石群を検出しており、 $2 \times 5\text{ m}$ の建物跡を確認した。礎石建物の北に接しては、周囲に礎石をもつ土壙が検出された。また、堀切側の七星には根石とみられる石列が確認され、さらに多数の礎が崩れた状態で礎石上に堆積していた。詰側の斜面は岩盤を垂直に削り、壁を作り出しており、下部には段状の遺構が検出された。詰下段と二ノ段の間には公園化による遊歩道が存在していたが、この部分についてもトレンチによって確認したところ、崩れていながら階段状の地形がみられ、詰下段と二ノ段の間には通路の存在が考えられた。詰下段における出土遺物はやはり土師質土器が大半を占めるが、量的には詰に比べ少ない。

調査期間は昭和61年7月28日から9月6日であり、調査面積は 332m^2 である。

4 第3次調査

第3次調査では、詰の東半部及び北部、三ノ段、堀切・井戸を調査対象地として調査区を設定した。詰の東半部は二ノ段からの遊歩道や貯水槽が設置されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは思われなかつたが、詰下段及び二ノ段との関連性をつかむために、 3 m 幅のトレンチ（H

区）を設定し、東端部を拡張した。H区の大部分では表土直下に岩盤がみられ、礎石と考えられる偏平礎、柱穴を検出したが建物としてはまとまらなかった。西端部では岩盤を掘り込んだ上塙を確認し、埋土中からは多量の土師質土器が出上した。東端部では岩盤を掘り込んだ溝が検出され、さらに詰下段に至る端部には土壌状に集石がみられた。この集石の裾部からは金銅仏及び鉄釘がまとまりをもって出土した。詰北部の調査区（I区）では、やはり表土直下に岩盤がみられ、ここでも岩盤を掘り込む小規模な溝を検出した。なお、最終段階において詰の南端にそって上級に隣接する横列等の遺構確認のために幅1m、長さ15mのトレンチ（J区）を設定したが、遺構は確認できなかった。

三ノ段は詰の南から西を囲む標高92mを測る曲輪であり、今回は南部を調査対象地として、2ヶ所のトレンチ（K区・L区）を設定した。両トレンチともに表土下において敷石、石列を検出したが、これは公園化による新しい時期のものであった。東部のトレンチK区をさらに掘り下げた結果、堆積は厚く地表下1~1.2mで地山がみられた。遺構としては地山面に2個の柱穴を検出したのみであるが、堆積土の中層下には多量の大礎が含まれていた。出土遺物はやはり上級質土器が大半を占めるが、地山面の直上において青磁の碗・盤等が出土している。

堀切・井戸について、堀切を南斜面へ追求する調査区（M区）及び井戸の北の現在通路として使用されている部分にトレンチを設定した。堀切は岩盤を深く掘り込んでおり、南斜面では堀切に対し直角に岩盤を削っているが、埋土、出土遺物等からみると新しい時期と考えられた。また、井戸は堀切の中央部に岩盤を掘り込んで作られているが、公園化によってすでに掘られていた。北の通路部分については、岩盤を掘り込んでおり、当初は北へも掘り切っていたものではないかと考えられた。出土遺物は近・現代のものと混在していたが、堀切の南下部からは第1次調査に続き2点目の刻銘瓦が出土している。

調査期間は昭和62年5月28日から7月25日であり、調査面積は230m²である。

IV 遺構

1 詰

第1・2次調査では、A・D・E・F区において礎石建物であるSB1及び石敷遺構のSX1が検出されており、他に土塁跡と柱穴も確認された。

SB1は詰の中央部南西寄りに位置しており、SX1の東半部に接続している。規模は、東西4間、南北5間と南北に長く、 $7.2 \times 10.4\text{m}$ を測る。礎石間の距離は1.8m前後を測り、よく揃っているところから原位置を保っていると考えられる。礎石の多くは岩盤である蛇紋岩の割石を使用しており、30~40cm前後の大きさを測る。南辺の礎石はSX1の石敷中に存在しており、他の礎石に比べると大形である。SB1の内部にも礎石が存在しているが欠落している部分もあり、建物の構成を推定するためには資料不足である。また、SB1の占める面積は約75m²を測り、極めて規模の大きい建物と言える。

SX1の西端部には1間四方の礎石建物であるSB2が検出された。SB2の礎石間の距離は東西が約2.0m、南北は約1.4mとやや東西に長い建物であり、北西の礎石は欠落している。また、SB1との間にも礎石とみられる割石が存在しており、さらにSX1の北に沿うように約2mの軸を測る浅い掘り込みが検出されていることから、SX1に沿ってSB1に接続する何らかの施設の存在が考えられる。

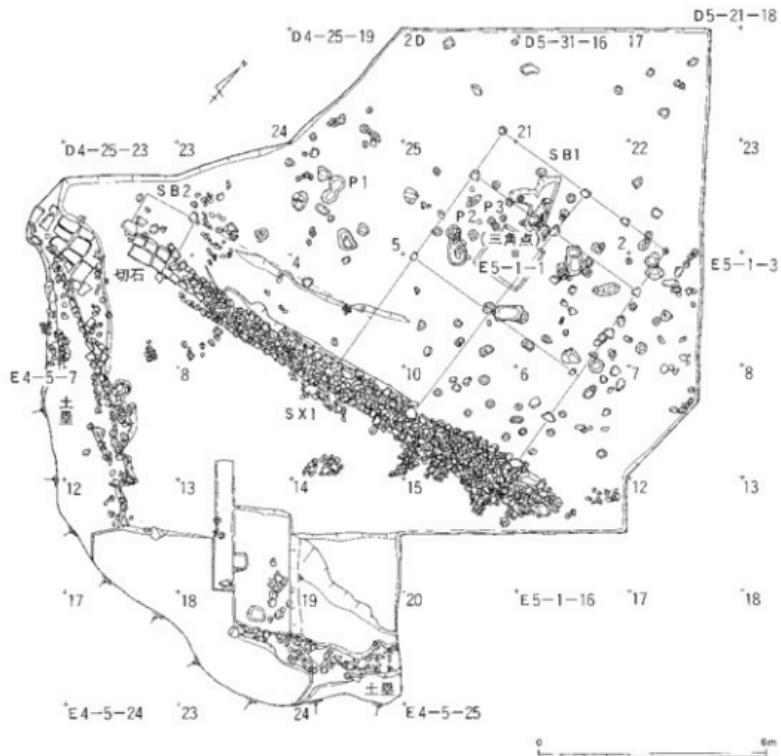
石敷遺構であるSX1は、詰の南西部に位置する。規模は、全長16m、幅1.0~1.5mを測り、方向は真北に対し東へ81°振っており、ほぼ東西方向を示す。石敷は、蛇紋岩を主体とする30~60cmの割石により構成されるが、若干の砂岩等の礫も混在している。また、東端部が最も広く、西へと次第に細くなっている。石敷上面の高さは標高96.20~96.30mを測り、全体的にみればほぼ水平である。また、石敷の基面は、北側が岩盤であり96.30~96.40mを測るのに対し、南側では岩盤はみられず、高さも96.10m前後と一段低い。

SX1の西端部には石敷に接続し、西へ延びる切石が検出された。切石は $20 \times 40\text{cm}$ から $40 \times 80\text{cm}$ 、厚さ約10cmを測る大形の方形であり、西端部に5個を2例に配し、東へやや小形の切石を1例に並べている。切石のレベルはSX1に比べ30cmほど高いが、SX1と一緒に遺構を形成するものである。また、1.2mの間隔をおいて十段上にも同様の切石12個が同じ高さをもち検出されており、関連性をみることができる。さらに、SB2の礎石が切石に接する位置に確認され、やはり高さも同レベルであることから、SB2に付属する施設の存在を考えることができる。

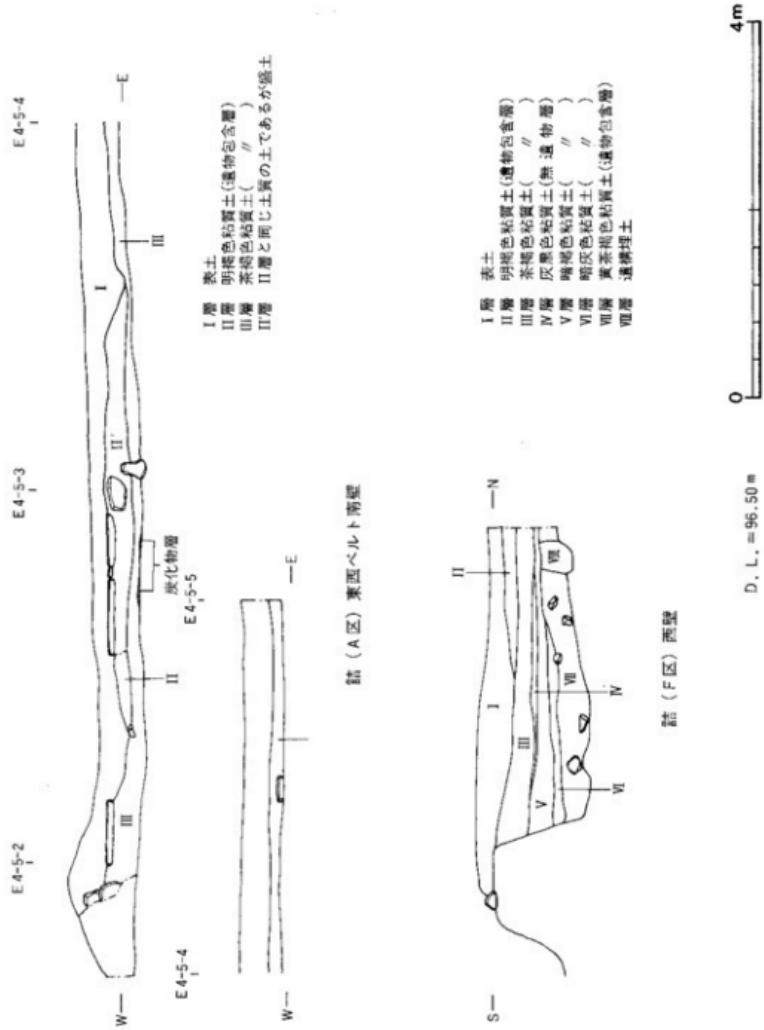
土塁跡は、A区及びE・F区において確認された。西の土塁跡は調査前の現況においても観察することができたが、調査の結果、幅1.0~1.5m、高さ40cmを測り、上部はかなり崩れているのではないかと思われるが、先に述べた切石とそれに続く土塁内側の根石とみられる20~30cmの割石による右列を検出した。また、南の土塁跡は残存状態が悪く、かなり崩れているが、やはりや小形の割石が集中して検出された。

柱穴の中では、SB1の西において検出されたP1から上質土器の杯と計91枚の渡米鏡が出土した。P1は直径60cm、深さ14.2cmを測るビットであるが、埋上上面に10枚前後の渡米鏡を、それぞれ中に収めた12個の杯が並べられた状態で出土しており、埋納されたものであろう。埋土は暗茶褐色粘質土であり、またP1の南には同規模の柱穴が接して検出されている。さらに、SB1の範囲内に位置するP2・3からも数枚の土質土器の杯が重ねられた状態で出土しており、渡米鏡は入っていないが、P1と同じく埋納されたものと考えられる。

調査区全体の岩盤の検出状態をみると、SX1の北においては表土下に検出されるが、南西部では低く落ち込んでおり、F区のセクションからは、岩盤面までの版築状を呈する堅固な盛土が観察され、詰の拵張をみることができる。SX1の位置、方向は岩盤が落ち込む端部に位置しており、その構築にあたっては、このような地形を考慮しているのではないかと思われる。また、



第6図 詰(A・D・E・F区)遺構平面図 (S=1/200)



第8図 諸(A・F区)セクション図(S=1/60)

南西部においては包含層が厚く堆積しており、下部には部分的に焼土と炭化物が混在している。S X 1は、この焼土、炭化物の上に築かれている。

詰の北部のB・I区では、若干の礫石ではないかと思われる割石が検出されたが、建物としてはまとまらず、移動したものであろう。他の遺構としては、I区の南半部の岩盤に掘り込まれた小規模な溝、S D 1が検出された。S D 1は幅10cm、深さ10~15cmを測り、一見岩盤の崩壊面とも見えるが、一辺1.2mの方形を画するようにL字形を呈しており、人為的な溝として取えられる。また、北部はやはり岩盤が低く、厚い堆積土が存在するが、南西部のような版築状の堆積はみられなかった。

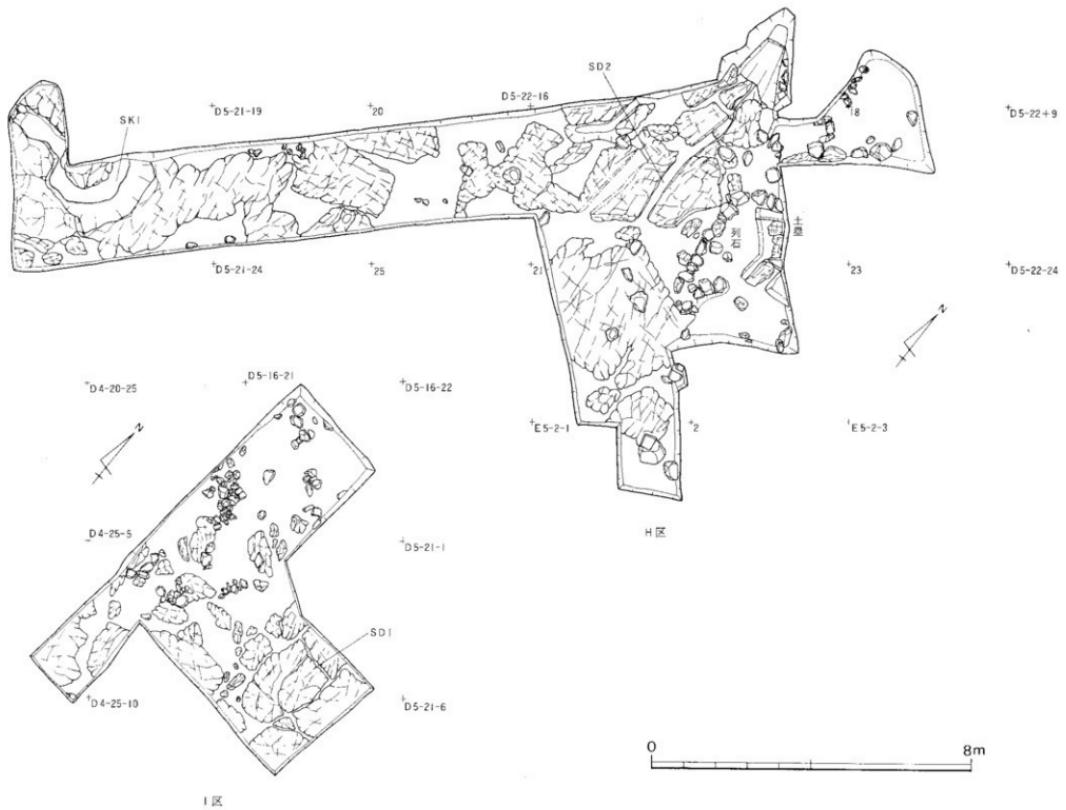
詰東半部の調査区であるH区の遺構とし、十箇1基、溝2条、土壙の根石とみられる列石が検出された。SK 1は岩盤を掘り込んだ土壙であり、H区の西端部にかかっている。規模は直径2.4m、深さ80~90cmを測り、平面形は不整円形である。西部へは幅80cmで1.6mほど延びており、中央部にはSK 1を埋めるかのような巨大的な礫が入っていた。埋土は暗褐色粘質土であり、多量の土師質土器杯を出土した。SD 2は、H区の東端部において検出された2条の溝であり、やはり岩盤を掘り込んでいる。規模は全長4.4m、幅20cm、深さ20~30cmを測る。方向は、南から北へと岩盤の傾斜とともに下がっており、端部では2条が合流し、岩盤が急激に落ち込み終っている。出土遺物としては、底部から手づくねの土師質土器杯が検出されており注目される。また、北東端の堆積土はF区のセクションにみられたような版築状の盛土であった。東端部においては、詰下段に対する上部に土壙状の地形がみられ、裾部には列石が検出された。列石は詰側に曲っており、20~30cmの割石が並べられていた。列石の端部下方からは、遺構に伴うものではなく搅乱を受けているが、金剛仏及び鉄釘が集中的に出土している。さらに、周辺部からは5cm前後の円礫も出土している。以上の遺構以外には、礫石とみられる割石と岩盤を掘り込んだ柱穴が検出されており、建物としてはまとまらないが、東半部にも何らかの施設の存在を考えることができる。

また、詰の南端部では、土壙内における横列、擋等の遺構の存在を確認するためにJ区の調査を行ったが遺構は検出されなかった。

2 詰下段

詰下段において検出された遺構は、礫石建物であるSB 3及びSK 2、それに伴う段状遺構等の地形整形と土壙跡である。

SB 3は詰下段全体に広がる礫石建物であり、礫石は詰側の斜面及び掘削側の上部にはほとんど接する位置に検出された。規模は梁間2間、桁行5間の南北棟であり、棟方向はN-30°-Wを示す。梁間5.8m、桁行9.2mを測り、礫石間の距離は、梁間2.8~3.0m、桁行1.6~2.0mを測るが桁行はほとんど1.8mである。梁間は桁行に比べ礫石間が広く、また桁行には礫石間にさらに半間の礫石が存在しており、北から2間の中央部には梁間の礫石に対応する礫石が検出されている。



第7図 誌 (H + I区) 遺構平面図 ($S = 1 / 100$)



第9図 跡下段 (G区) 造構平面図 ($S = 1/100$)

礎石は40～60cmの偏平な割石を使用しており、南梁間及び東桁行の半間の礎石が一部欠落するが、他は非常によく残されている。SB 3の占める面積は約53m²と、SB 1に比べやや小形ではあるが、規模の大きい建物である。なお、桁行は北に一部礎石と思われる割石が存在するところから6間の可能性も残されている。

SK 2は、SB 3の北東に接する位置で検出され、周囲に礎石を伴っている。規模は0.9×1.1mの方形であり、深さは87cmを測る。底部は平坦であり、壁は急角度で立ち上り、断面形は逆台形を呈する。検出面から20cmほど下は岩盤を掘り込んでおり、埋土は暗褐色粘質土である。埋土中には焼土と炭化物が混在しており、壁も一部焼け赤化している。また、周囲にみられる礎石はSB 3の礎石と揃わないが梁間に接しており、土壌を作り付属施設と考えられる。

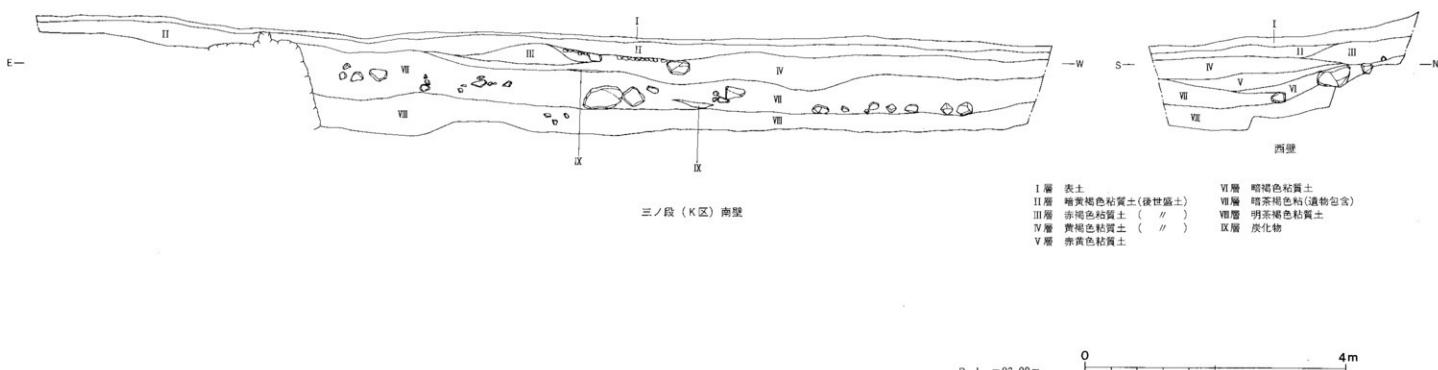
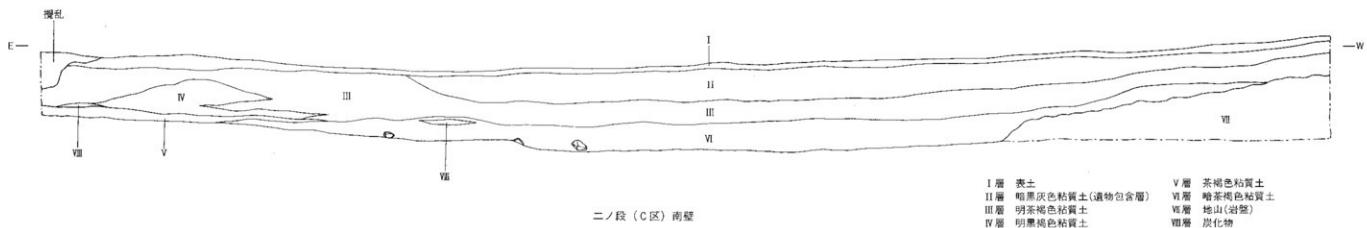
土壌は掘削側によく残されており、現況でも十分に存在を知ることができる。調査の結果、SB 3の礎石に接するように根石の石列が検出され、その規模は、草部で幅2.5m、高さ1m以上と推定される。上壁の断面観察によれば、版築状の盛土は存在せず、上部は後世の盛土であり、やはり上半部は崩れたものであろう。なお、根石の石列上からSB 3の礎石上に多量の割石が乱雑に堆積しており、上壁の崩壊を示しているとみられる。また、詰下段の南端部にも石列が確認されたが、平坦面の端部に石垣状に積んでおり、表土層中に含まれていることからも後世の公園化による整備と考えられる。

詰側の斜面は、岩盤のみられる約7mの間にわたりて垂直に削り落しておらず、様を作り出している。さらにその下部には、全長6.8m、幅1.0m、高さ30～40cmを測る、盛土による段状遺構をSB 3の礎石に接するように作り出している。セクションでみるとこの盛土は、版築状の堆積土ではなく、明茶褐色粘質土の單一層であるが、非常に堅く締っており若干の土師質土器片を含んでいる。また、南北端部には公園化による三ノ段への遊歩道が整備されていたが、確認のためにトレンチを入れたところ下部から階段状の整形面を検出し、一部には敷石とみられる傾斜割石も認められ、三ノ段への通路が存在するのではないかと考えられた。

詰下段の出土遺物は詰に比べ少量であるが、やはり土師質土器を中心としており、他に青磁・染付等も出土しており、SB 3内部には礎石面上で石臼片が出土している。

3 二ノ段

二ノ段は第1次調査時に2×20mのトレンチであるC区を調査したのみであるが、結果的にみれば遺構は検出されず、二ノ段全体においても一部後世の搅乱を受けているところからみて、良好な遺構の存在は期待できない。しかし、層序中には焼土及び多量の炭化物を含む層がみられ、多量の上師質土器・瓦片を包含している。また、上部30cmは新しい盛土であり、以下の焼土、炭化物及び遺物包含層は当時の盛土層と考えられる。



第10図 二ノ段 (C区)、三ノ段 (K区) セクション図

4 三ノ段

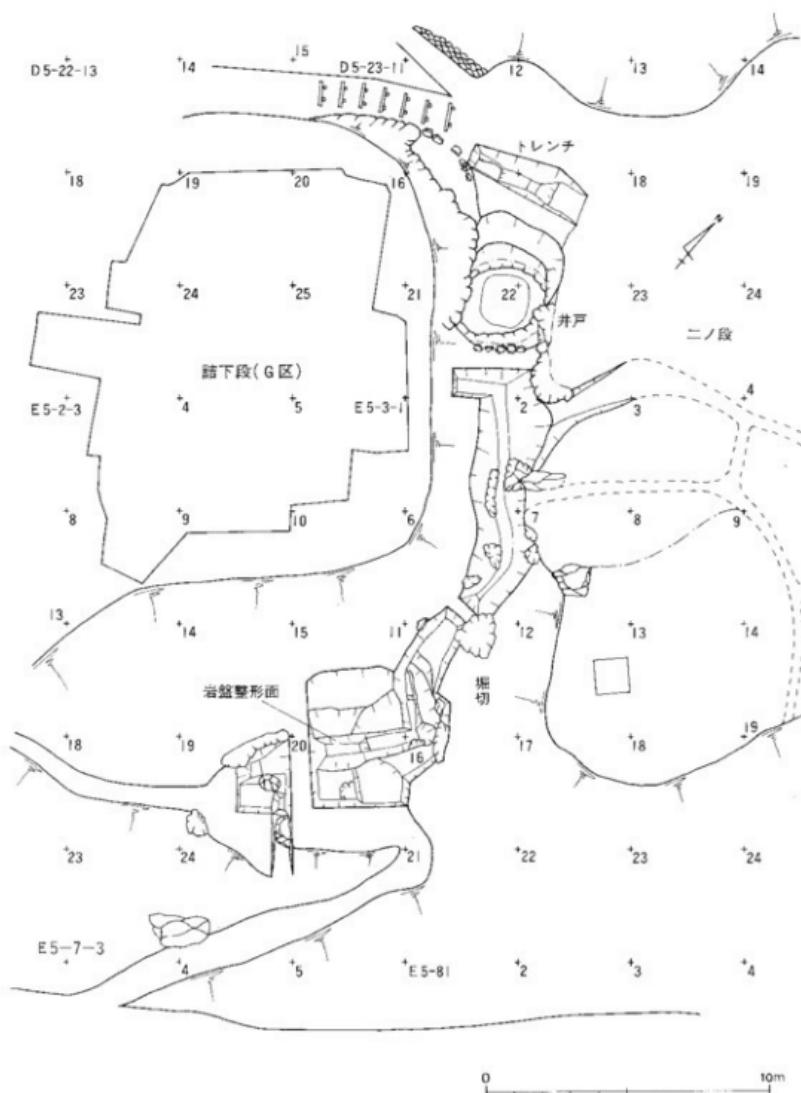
三ノ段は、南部を調査対象地としてK・L区の2ヶ所の調査区を設定した。調査はK区を地山まで下げ遺構を確認し、L区では一部に層序確認のためのトレンチにより地山を確認した。K・L区ともに地表下の盛土中に敷石、列石を検出したが、これは公園化により整備されたものであった。K区では、地表下約1.4mで岩盤の地山を検出しており、この岩盤上に2個の柱穴を確認した。柱穴は直径25~30cmを測る円形であり、深さは30~40cmと深い。柱穴は調査区の中央部に約1.0mの間をもって位置しているが、周囲に他の遺構は検出されなかった。調査区のセクションからみれば、上部約60cmほどのI~III層は敷石等に伴う盛土以降の新しい堆積であり、IV層以下がプライマリーな堆積層である。IV層中にはやはり多量の炭化物と焼土の集中が部分的にみられ、土師質土器を中心に青磁等の遺物も多く含んでいた。また、IV層の下半部には乱雑に堆積した30~60cmを測る大形の割石が多量に出土しており、詰の斜面裾部へと続いている。出土状況及び割石の規模からみると、詰の斜面に積まれていた可能性があり、これが崩落し、三ノ段へ堆積した後に上面を整地しているのではないかと考えられる。また、L区においてもトレンチのセクションからみて、地表下約1.0mに炭化物を多量に含む一層が存在しており、二ノ段と同様に三ノ段においても全面に炭化物を含む層が分布しているようである。

5 井戸・堀切

井戸及び堀切を確認するための調査区、M区を中心部から南斜面部へかけて設定した。堀切の現状は、北部に二ノ段から詰への通路が存在しており、通路の南に接して井戸が位置している。井戸からは南へ急激に落ちており、標高90mを測る部分において土壠状の地形に接続し、終わっている。また、堀切自体が公園化により二ノ段から南へと下る遊歩道として使用されている。堀切の調査区は土壠状の地形までとし、以下自然地形である。また、井戸北部の通路部分の確認のために1×3mのトレンチを設定した。

堀切は、岩盤を幅60cm、深さ約1.0mほど掘り込んでおり、やや蛇行し南へと下っている。土壠状地形手前の斜面は、堀切に直交するように詰側の岩盤を垂直に削る岩盤整形面が検出され、一部深掘りのトレンチにより確認したところ、4m以上の高さをもつ壁を作り出していることが確認された。堀切の埋土は上部30~40cmが遊歩道としての整備のための盛土であり、以下の層は茶褐色粘質土であるが、土師質土器とともに新しい時期の遺物が混在しているので疑問が残るところである。また、土壠状地形手前の堀前面の埋土の底部からは近・現代の遺物が出土しており、土壠状の地形も含め全体が後世の埋土及び盛土である。以上の結果からみれば、二ノ段西端部（堀切の上部）には太平洋戦争中に高射砲陣地が設置されていたことも考慮すると、堀切の岩盤掘り込み及び岩盤整形面の壁も後世の所産である可能性が強い。出土遺物としては岩盤整形面前のトレンチから流れ込みではあるが、2点目の刻銘瓦が発見されており注目される。

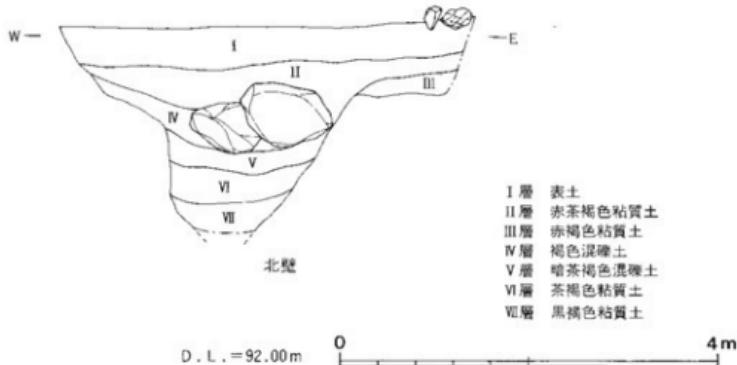
井戸は、堀切のほぼ中央部に位置しており、規模は、上部約3.0m、底部80cmを測る方形を呈し



第11図 井戸・堀切 (M区) 遺構平面図 (S = 1/200)

ているが、上部は不整形である。岩盤の掘り込みは約3.6mであり、ほぼ垂直に近い壁をもち、方形に整形している。深さは二ノ段側の上面から4.7mを測る。岩盤の上面には、堀切を横に区切るように北に2段、南に3段の割石の石積みがみられ、井戸の深さを増すとともに上部を形成している。井戸は公園化された折に一度底部まで掘られており、今回の調査時における埋土はすべてそれ以後のものであった。なお、過去に掘られた時には多量の瓦が出土したことである。また、湧水はほとんどなく、雨後に岩盤上面からわずかに流れがみられるのみであり、天水を溜めたもので溜井としての性格が考えられる。

井戸の北の通路部分のトレンチでは、岩盤がV字状に掘り込まれており、堀切は南だけではなく北へも続いていたことが確認された。当初の状態は、この堀切により詰と二ノ段は完全に隔絶しており、木橋による通路が存在していたのではないかと推測される。また、岩盤の掘り込み部分にはやや乱雑にではあるが40~60cmの大形の割石が詰められており、セクションからみても盛土層と考えられる土層が存在することから、ある時期には、この北端部が埋められ、土橋として使用されていた可能性も十分に考えられる。



第12図 井戸北トレンチセクション図

V 出土遺物

岡豊城跡出土の遺物は、昭和60年度以降3次に渡る調査で、土師質土器、輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）、国内産陶器、瓦類、土製品、石製品、金属製品が出土している。その中でも上御質土器の量が最も多く、県内の他の中世山城と同様な出土状況を示している。しかし、細片が多いことや、詳細な遺物整理を実施していない現段階では、その全体像を適確に把握し難い状況下に在ることを承知いただきたい。

さて土師質土器の器種構成としては杯・小杯・皿・小皿等が認められる。そして、輸入陶磁器では、白磁が少なく染付が比較的多く検出されている点が特徴的である。その他瓦類も出土しており、その中には、天正三年刻銘の瓦片も含まれている。本城跡出土の遺物は、遺構に伴うものが少なく、包含層であるⅡ・Ⅲ層出土のものが多いため、ここでは種類・器種ごとに概要をまとめることにする。なお、詳細については法量表も参照されたい。

1 土師質土器

上御質土器は、皿・小皿・杯・小杯が出土している。杯・小杯はロクロ成形によるもので、底部にすべて回転糸切り痕が確認できる。皿については、ロクロと未ロクロの両者が確認できる。小皿は少なく、ロクロ成形によるものである。色調は全体的に浅黄褐色を呈するものが多い。

1～3までは、未ロクロの皿である。口径8～9cmで、やや小振りである。口縁部は横ナデが施され、体部は指頭によるナデや圧痕が観察できる。1～2は横ナデが強く口縁部が外反する。4～6はロクロ成形の皿で、口径10～11cmで器高3cmを測る。底部はすべて回転糸切り痕が残り、形態に若干の差を見ることができる。4は体部が内湾気味に外上方に立ち上がり、5・6は直線的である。さらに6は、端部面取りが行われている。7は耳皿で1点のみ出土しており、底部は回転糸切り痕が残りロクロ成形である。8～21は小杯であり、杯の小型化したものである。口径6～7cm、器高1.5～2.5cm内外におさまるものである。すべてロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が残る。小杯の中には、大振り、小振りと若干法量の差が認められるが、同一器種として捉えることができるものである。22・23は小皿である。いずれもロクロ成形であるが形態に差が認められる。器高は1.5cmまでで、小杯とは区別でき得るものである。また23に見られるように口径と底径の差がなく、短く口縁部が立ち上がる特徴を有するものも存在する。24～41は杯である。24～26は、やや小振りの杯で口径9.5～10.5cmを測り、器高は3cm内外である。ロクロ成形で体部は直線的に外上方に立ち上がる。皿4と器高指数はほぼ同値を示すが、形態的に異なる点が認められる。27～39は杯の典型的なもので口径11～13cm、器高3.5～4.5cmを測る。ロクロ成形で内外面ロクロ痕が残り、底部は回転糸切りである。体部は直線的に外上方に立ち上がる。40は口径が14.3cm、器高3cmで口径が広いが、これは特異な現象である。41は、内底面の中央部に径5mmの小孔が穿たれているが貫通はしていない。底部回転糸切り痕の後に平行圧痕が施される。

114は火鉢である。体部から口縁部にかけて外傾して立ち上がり、口縁端部は若干拡張される。内外面ナデ調整である。

2 輸入陶磁器

輸入陶磁器は、青磁・染付・白磁が出土している。青磁は碗類が比較的多く出土しており、模花皿も目立つ。輸入陶磁器の全体量からすると青磁について染付が量的に多い。しかも、16世紀後半の新しい時期に出現するものも認められる。ただ16世紀代の遺跡で出土する白磁の端反りの皿は少なく、現段階では細片が数点確認できるのみである。

青磁

42～46は碗である。42は、底部から内湾して外上方に立ち上がる形態をとり、釉は高台外面まで灰褐色釉が施され貫入がはいる。高台内、豊付は露胎である。43は口縁部破片であるが、大振りの碗と考えられる。釉が厚く、内外面に荒い貫入がはいる。内外面は無文である。44も内外面無文の碗で貫入は認められない。45は線描蓮弁文の碗である。体部から内湾気味に口縁部へと立ち上がり、内外面に貫入がはいる。46も同様にヘラ描による細蓮弁文の碗であるが、細線と劍頭とが、蓮弁としての単位にやや乱れを生んでいるものである。口縁部外面に一条の横線が施され、内外面に荒い貫入がはいる。47～49は棱花皿である。口径11～14cmを測り、47・49はやや大振りの皿である。いずれも内面に櫛描きの文様が施されており、49などは横線のみと簡略化されている。すべて内外面に貫入がはいる。50～52は盤である。50は豊付の中程まで釉が施され、外底は無釉である。内外面に貫入がはいる。51は50よりもやや大振りの盤である。底部から大きく外方に内湾して立ち上がる。豊付のみ露胎で、すべてに釉が施され内外面に貫入がはいる。52は口縁部で水平に近く屈曲し、さらに端部は上方に肥厚する。内面には幅広の蓮弁文が施される。

白磁

白磁は量的に少なく、細片が若干出土しているのみである。53は底部破片であるが底径3.2cmを測り、器種は小杯になると考えられる。豊付のみ露胎である。

染付

54～68は皿である。54は体部で大きく外反し、やや大振りの皿である。見込みは界線中に線描きされ、塗りつぶされるという濃技法が使用されている。高台脇に波状の文様が施される。豊付のみ釉が剥きとられ総釉である。55は一般的によくみられる皿で、見込みの二重界線中に玉取獅子、体部外面は牡丹唐草文が描かれる。62が口縁部破片になる可能性がある。豊付のみ釉が剥き取られ、総釉である。56は体部が内湾して立ち上がり、口縁部が外反する皿である。外面に唐草文が施される。57は口縁部が外反するやや小振りの皿で、口唇部に口紅が施される。また体部内面には丸ノミ状工具による蓮弁状の文様が施される。見込みの文様は不明。58も小振りの皿で、高台外面に2条の界線と見込みに十字花文が描かれる。59は56と同様に外面に唐草文が施される。60・61は同一個体の可能性もあるが、体部が内湾して外上方に立ち上がる形態である。62は、口縁部が端反りの皿である。外面に牡丹唐草文が施される。63は大振りの皿で口縁部は端反り、豊

付のみ露胎で縦釉である。体部外面は界線に囲まれた唐草文、内面は口縁部に1条の界線、見込みは2条の界線に囲まれ花樹文と考えられる文様が描かれている。64は、外面牡丹唐草文で、見込みは2条の界線中に十字花文が描かれる。疊付は釉が剥きとられており、一部砂が溶着している。口径9cmの小振りの皿である。65は体部から内湾して立ち上がる形態で、口縁部外側に波濤文、体部に芭蕉葉文が描かれる。底部は欠損しているが基底底の皿である。66は見込みに人物画が描かれ、外底も2条の界線中に文様が施されている。疊付は釉が剥き取られている。67は底破片で文様構成も明確でないが、比較的大振りの皿になる。68も67と同様であるが、見込みの具須の発色が明るい。高台部下端と疊付は無釉である。

69~71は碗である。69は口縁部外面に雷文、体部に鳳凰唐草文を描いている。内面は、口縁部に2条の界線が施されるのみである。70は口縁部が外反し、外面に唐草文を描いている。71は69と同様な形態で、外面の文様は不明である。

3 国内産陶器

瀬戸・美濃系の天目茶碗、備前焼等が出土している。

72は天目茶碗である。底部は欠損しており口縁部は若干外反する。黒釉が施される。73~79・81~83は備前焼である。73・74・83は壺で、73は口縁部がやや外反して直線的に立ち上がり端部はやや肥厚する。内外面ロクロナデである。74は口縁部が短く立ち上がり、若干外反する形態を呈す。端部は肥厚し、内外面ロクロナデである。83は口縁部が短く直立して立ち上がり、端部が若干肥厚する。75~78は甕である。すべて口縁部は上縁であり、形態に若干の差が認められる。75・78はやや外反しており、その他は直線的に上方に立ち上がる。77は肩部が張っている。甕は4点とも口縁部の小破片であるため、法量等不明であるが、口縁部の形態からほぼ同時期の所産と考えられる。81・82は鉢である。81は体部が直線的に外上方に立ち上がり口縁部は上に拡張される。内面の条線の単位は確認できない。82は、体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がり、端部は外下りに斜めに切り落としている。柳条線の単位は8条で下から上へ施されている。時期的に占い所産である。

4 瓦質土器

84は火鉢である。胴部から内湾して口縁部は内傾する。端部は水平な面を有す。外面は2条の貼付突帯の間に4条単位の直文がスタンプされる。85は鉢である。口縁部は直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外方に拡張される。外面は丁字なミガキ、内面はナデ調整である。

5 土製品

86はフイゴの羽口である。直径9cm、中央の孔が2.5cmを測り、胎土は粗い。87~105は土錐である。山城としては比較的多く出土している。形状は管状を呈しており、長さ5cm内外、幅が

1.5cm程度の製品が多い。色調はにぶい橙色を呈するものが多い。

6 瓦類

軒丸瓦は、すべて三巴文を配するもので瓦当文様構成で若干の差をみることができる。106の巴文は右回りで、頭部の丸味は少なく、末尾が他の巴の尾に接しており圓線状になる。珠文は径0.4cmで、やや大きく間隔が開くものである。瓦頭の直径は14cmを測る。107は、左回りの巴文で、頭部は丸味を帯びており、末尾が他の巴の尾に接してはいない。珠文は、0.2~0.3cmで106と比較すると小さく間隔も密に配置されている。直径は復元で約13cmを測る。時期的に107が古い様相を呈している。108は軒平瓦で、瓦当文様は左右対称形の均整唐草文を配する。脇区幅は3.2cmを測る。109・110は丸瓦で、背の部分に刻銘が施されている。109は、「おかう之御……」「瓦工泉彌□……」「大正三□……」と3行にわたって刻し残余の銘は破損して不明である。110は、「此瓦……」「新画か……」「丁時……」「於弔……」「□……」と5行にわたって刻まれている。これも破損して残余の銘は不明である。いずれも谷面には、細かい布目と縱方向のヘラ削りが施される。110は縦状の痕跡が残り、主縫部の小口内側と周縫は丁寧なヘラ削りによって面取りされる。111は平瓦である。復元でき得るもののが少なく長さ、幅は不明である。

7 石製品

石製品は、硯と臼が出上している。112は、硯であるが陣部が欠損している。断面長方形を呈し、側面は底部より上面にかけて垂直に立ち上がり磨きこまれる。現存部分で長さ6.5cm、幅4.8cm、高さ1.3cmを測る。石質は輝緑凝灰岩と考えられる。115・116は臼である。115は上臼で、半径15cm、高さ10.6cm、芯穴の復元径3.4cmを測る。分画の詳細は細片のため不明であるが、溝間が広く4条以上の溝を有する。溝は丸溝である。116は茶臼の上臼で、大部分が欠損しているが、挽き手穴が側縫の中央部に認められる。挽き手穴は方形で一辺1.9cm、高さ12.1cm、芯穴の復元径3.2cmを測る。溝間が密で6条以上の溝を有し丸溝である。

8 渡来銭

渡来銭の多くは、詰からの出土である。1次調査のP1から土師質土器の杯と共に91枚と多量に出土している。種類としては宋銭と明銭であり、前者は景德元宝、天祐通宝、政和通宝、後者は洪武通宝、永樂通宝、宣德通宝等が見られる。大きさは、2.3~2.5cmのものが多い。明銭の永樂銭には初鋤のものと後鋤のもの二者がみられ、宣德銭を以ってP1出土の渡来銭では最終のものとする。

9 その他の遺物

詰の東部より113の金銅仏が出土している。金銅仏は懸仏として使用されたと考えられ、蓮華

座に4ヶ所、宝冠部に4ヶ所の穿孔がみられる。高さ9.5cm、蓮華座の幅5.1cmを測り、半肉の銅像製品で觀音像とみられる。その他に鉄釘、スラグ、貝類が出土しており、貝類は二ノ段から多く出土している。種類としてはハイガイ・マガキ・カガミガイ等であり、特に泥海性の貝類が多い。

VI 総 括

1 遺構について

岡豊城跡の第1～3次調査によって検出された遺構は、詰及び詰下段を中心として、礎石建物、石敷遺構、切石、土壇、溝、土塁、柱穴等であった。

詰で検出されたSB1は、SX1及びSB2と関連をもつ4×5間の建物であり、岡豊城跡の中では最大規模の礎石建造物と考えられる。石敷遺構のSX1は、SB1と接続しているところから建造物の基礎として構築されたものと考えられ、SB2の存在、さらにはSB1との間をつなぐ構造物の存在を考えるならば、SX1を基礎とする強固な外壁を南面にもつ一連の建造物の姿を想定することができる。位置的には詰の南西部の最も広い場所に存在しており、眺望も最もよく、機能としての機能も有する中心的な建造物であり、天守の前身的な性格をもっていたのではないかと思われる。また、SB2とSX1西端部及び土塁上の切石は、この建造物に関する出入り口的機能を有すると考えられ、土塁にも接続していたと推定される。内部構造については不明であるが、SB1内にも礎石を伴っており、石敷遺構の存在からみても二層以上の構造をもつ建造物と考えてもよいのではないだろうか。

一連の建造物の方向は、真北に対しほぼ東西方向を示しており、これは基盤である岩盤の端部にそっており、建造物の基礎を強化するものと考えられ、同時に地形だけではなく方位も考慮しているとみられる。また、詰の南西部及び東部の岩盤が低く落ち込んでいる部分には版築状の盛土が行われており、詰の有効面積を拡張し、その構造を強化するために計画的な補強がなされている。時期的には、二ノ段、三ノ段にもみられる焼土及び炭化物層の上にSX1が構築されているところから、国親による再興以降と考えられ、元親による大高坂城移転時の最終段階を示しているのではないだろうか。

詰では他に土壇と溝が検出されている。SK1は詰のほぼ中央部に位置しており、岩盤を深く掘り込んでいるところから天水溜めとして機能していたのではないかと推定される。埋土中には多量の土師質土器を含んでおり、中央部には直径1m以上の岩盤礎が入れられており、移動時に埋められたものと考えられる。溝は北部と東部において検出されているが、小規模であり、岩盤の端部に掘られているところから排水用の溝として機能していたものであろう。時期的には東部の溝から手づくねの土師質土器が出土していることからみれば、他の遺構に比べやや古く考えてもよいのではないだろうか。また、周辺には礎石とみられる割石も存在しており、何らかの建物に関連する可能性もあるが現段階では不明と言わざるを得ない。

詰下段のSB3は2×5間の礎石建物であり、詰下段全体を占めている。規模が大きく、土塁及び詰側の段状遺構にそっていることから、土塁、堀切と一体となって詰東部における防禦的機能をもち、かつ城詰における居館の一部としても使用されていたのではないだろうか。礎石は一部欠落もあるが、半間の柱間の礎石がみられ、やはり強固な構造をもっていたと推定される。詰

側の段状地形はSB3への通路ではないかと考えられ、さらに詰下段と三ノ段をつなぐ通路とみられる階段状地形へも通じ、詰から詰下段、三ノ段への通路が存在していたのではないだろうか。SB3の東に接しては周囲に礎石を伴う土壌、SK2が存在しており、壁面の赤化、埋土中の焼土、炭化物がみられ、SB3に付属する火の使用に関係した施設の存在が考えられる。

以上の如き詰及び詰下段における建造物の検出は、中世山城の中心部の構造を示すものとして注目されるものである。ちなみに県内の他の中世城跡の調査例では、波川城跡（註1）、久礼城跡（註2）の例がある。詰にも礎石建物がみられるが、城跡の規模同様に小さい。また、一条氏支配下の居城であった中村城跡（註3）の調査でも詰における良好な礎石建物は検出されていない。その点で戦国時代末期の城跡の構造を知る上で貴重な資料と言えるのではないだろうか。

二ノ段、三ノ段については、調査面積も少なく、遺構もほとんど検出されていないので不明な点が多い。ただセクションにみられる焼土、炭化物の層は注目され、永正5～6（1508～1509）年、19代兼序の代における落城に関連するものと考えられ、併せて二ノ段、三ノ段にこれらが存在するのは、永正13（1516）年前後の20代国親再興時における整地のためと考えてよからう。また、三ノ段にみられる多量の割石が詰斜面に築かれた石積みの崩壊を示すものとすれば、中村城跡において検出された石垣（註4）に類するものとしなければならない。さらに詰、詰下段の土塁では、根石とみられる石列が検出されており、特に詰下段における土塁では多量の割石が崩壊したかのような状態で出土していることから、土塁の基部には数段の石積みが存在していたのではないかと推測され、三ノ段出土の割石とともに、野面積みの石垣が存在した可能性が非常に強い。

堀切は調査の結果として、当初は北部まで岩盤を掘り込み、詰と二ノ段を隔絶せしめていたことが判明した。そして木橋を使用して両者を連結していたと考えられる。しかし、埋土中の大形の割石の存在からして、ある段階以後は堀切の北部が埋め戻されて土橋に変化していったと考えられる。また、井戸の位置は堀切の中央部であり、通常の場合堀切内における井戸の存在は考え難いことから、井戸の時期を知る手掛りがないので断定できないが、北部に土橋が構築された時点で堀切を必要とせず、そのために井戸が掘られたのではないだろうか。そしてこの時期は、岡豊城跡が周囲からの攻撃を受けなくなる時期、すなわち十佐一国を統一した段階でのかなり大規模な改修が行われたものと考えてはどうであろうか。

堀切及び南斜面の岩盤整形面については、後世の所産と考えられる要素が多く、当時の姿は不明と言わざるを得ないが、南斜面が急傾斜をもつところからその自然地形を城跡の中へ取り入れているものとみられる。

以上のように、詰、詰下段の建造物、土壌、溝、土塁等、中心部の配置、構造についてはかなり明確にすることことができた。また、井戸・堀切の調査では、その時期的な変化の一端を知ることができ、さらに三ノ段の調査では詰周囲の斜面における石垣の存在の可能性が考えられる等その成果を上げることができた。しかし、四ノ段、虎口の調査、さらには「伝既跡」「家老屋敷」等の副

郭部も含め全体的な構造については未調査であって、今後はその解明にむけて調査を進めていかなければならないものと考える。

2 出土遺物について

岡豊城跡出土の遺物は、山城という性格上包含層出土のものが大半である。しかし天正16(1588)年に居城を大高坂城(現在の高知城)に移転した後は、廃城と化し近年において公園化されるに至るまで遺構等の残存状況は良好であった。遺構出土の一括性に弱い点もあるが、全般的に16世紀代の遺物が中心である。ここでは、主に土師質土器を形態分類し、若干の考察を行い本城跡出土遺物の位置付けを追求することにする。

土師質土器は、杯・小杯・皿・小皿の器種構成である。小杯は、全個体にさほど差を認めることができないので分類から除外し、杯・皿・小皿について法量及び形態の差異から以下のように分類を行う。

杯A……口径9.5~10.5cmで、器高3cm内外のもの。体部直線的でロクロ成形。(24~26)

杯B……口径11~13cmで、器高3.5~4.5cmのもの。体部直線的でロクロ成形。(27~38)

杯C……口径14cm、器高は3cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。(40)

皿A……口径8~9cmで、器高2~2.5cmを測る。手づくねによる成形である。(1~3)

皿B……口径10~11cmで、器高2.5~3cm以内で、ロクロ成形である。(4~6)

小皿A……口径7.5cmでロクロ成形。体部が内湾して立ち上がる。(22)

小皿B……口径6.5cmでロクロ成形。体部は直線的に短く立ち上がる。(23)

杯は、3類に分類したが大きくは杯Aと杯Bの2つに分かれるもので、杯Cは特異な形態と考えられる。杯Aは、杯Bに比してやや小振りであるが、口径と底径の比率が約2:1で、杯Bは3:1になるものが多い。杯Bは、岡豊城跡にみられる杯の典型的なものである。この2形態の差は、田村遺跡群Loc.42のSD2、SD7にみられる出土遺物の差に類似しており、若干の時間差を考えることができるものである。皿においては、皿Aが手づくね、皿Bがロクロといいう成形における基本的な差が認められる。皿Aは、口径8~9cmを測り、田村遺跡群Loc.42のSK96(註6)や芳原城跡(註7)で出土しているタイプよりやや小振りである。出土点数も少なく、出土範囲も金剛仏の出土した詰東端部付近である。これらのことを考えると、皿Aの用途に皿Bとの相異を類推することができる。筆者が以前中世土器の様相(註8)として、16世紀前半頃に土器生産の面積が認められると指摘したところであるが、本城跡出土の土師質土器皿は、田村遺跡群Loc.42に使用された土器皿とは基本的に成形、法量において差が認められ、16世紀前半より先行するとは考えられない。今後本報告において、県内15~16世紀の遺跡と比較検討することにより、さらに詳しく分析し、本城跡出土の土師質土器の位置付けをおこないたい。

その他、輸入陶磁器では、青磁・染付が比較的多く出土しているが、染付の中で、54・66・68・69は16世紀後半の時期と考えられる。69の碗は、大橋編年N-b類(註9)である。備前焼

では、82の揮鉢が1点のみ古い時期におさえることができる他は16世紀代のものである。天日茶碗は数少ないが大盛期のものである。瓦類では、天正三年銘の瓦片も出土している。以上のことから、出土遺物の全体的把握として、下限を大高坂移城の1588年をあてることができ、上限については、82の備前燒搗鉢を除けば16世紀前半の時期を考えることができるが、今後出土遺物の詳細な分析及びその位置付けをしなければ明確におさえることはできない。城跡の構築時期を含め今後の課題となるところである。

註1 脇本健児「波川城跡の発掘」(『土佐史談』137号 1974年)

註2 中土佐町教育委員会『久礼城跡』(1984年)

柱3 中村市教育委員会『中村城跡』(1985年)

註4 註3に同じ。

註5 高知県教育委員会「Loc.42」(『田村遺跡群』第10分冊 1986年)

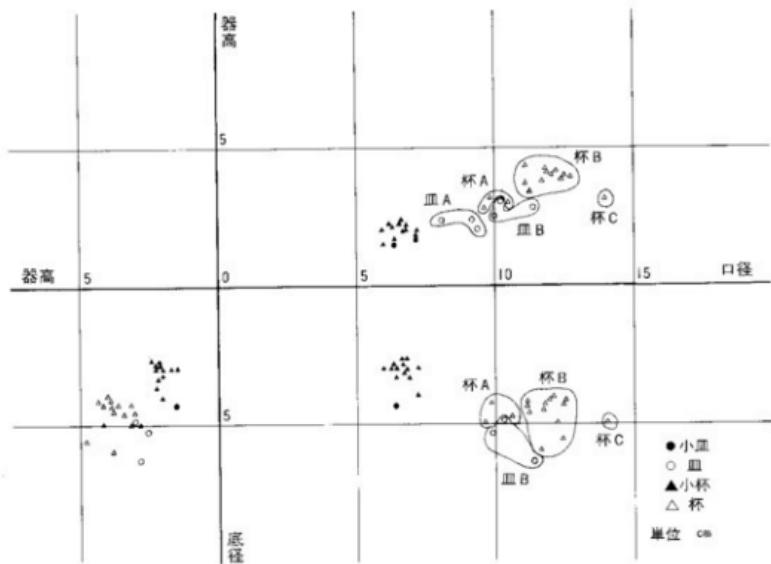
註6 註5に同じ。

註7 高知県教育委員会『芳原城跡発掘調査報告書』(1984年)

註8 松田直則「高知県における中世土器の様相」(『中近世土器の基礎研究Ⅲ』

日本中世土器研究会 1987年)

註9 大橋康二「15・16世紀における日本出土の青花碗に関する編年試案(1)」(『白水』No.8 白水会 1981年)



第1表 土師質土器法量表

第2表 出土土器法量表1 [()は復元及び残存値]

掲出 番号	種別	器種	法量(cm)				外 形	色調	調査年次 出土地区
			口径	器高	底径	高台高			
1	土師質土器	皿	(8.1)	2.3	—	—	—	にぶい黄橙・10YR 7/4	1次 詰
								橙・7.5YR 7/6	
2	"	"	(9.4)	2.0	—	—	—	橙・7.5YR 7/6	1次 二ノ段
								"	
3	"	"	9.2	2.4	—	—	—	にぶい橙・7.5YR 7/4	3次 詰(SD2)
								"	
4	"	"	10.3	3.0	4.9	—	—	橙・7.5YR 7/6	3次 詰
								"	
5	"	"	11.4	2.8	6.4	—	—	橙・7.5YR 7/6	1次 二ノ段
								"	
6	"	"	10.0	2.5	5.0	—	—	橙・7.5YR 7/6	3次 詰
								"	
7	"	耳皿	(10.1)	(1.7)	—	—	—	淡橙・2.5Y 8/3	3次 三ノ段
								"	
8	"	小杯	6.3	2.1	2.9	—	—	淡橙・2.5Y 8/3	3次 詰(SK1)
								"	
9	"	"	6.6	2.4	2.7	—	—	橙色・7.5YR 7/6	1次 詰
								"	
10	"	"	(6.0)	1.5	3.0	—	—	淡黄橙・7.5YR 8/6	"
								"	
11	"	"	7.2	2.0	3.0	—	—	にぶい橙・7.5YR 7/4	2次 詰
								"	
12	"	"	6.2	2.2	3.0	—	—	淡黄橙・7.5YR 8/6	1次 詰
								"	
13	"	"	(6.9)	(2.2)	3.2	—	—	橙・7.5YR 7/6	2次 詰
								"	
14	"	"	6.8	2.2	3.0	—	—	橙・7.5YR 7/6	"
								"	
15	"	"	(6.6)	2.3	2.9	—	—	橙・7.5YR 7/6	1次 詰
								"	
16	"	"	6.8	2.1	2.7	—	—	にぶい橙・7.5YR	2次 詰
								橙・7.5YR 7/6	
17	"	"	(6.4)	1.7	(3.0)	—	—	淡黄・2.5Y 8/4	1次 二ノ段
								"	
18	"	"	(7.2)	1.9	(4.0)	—	—	椿・7.5YR 7/6	1次 詰
								"	
19	"	"	(6.4)	2.1	3.4	—	—	黄椿・10YR 7/4	"
								"	
20	"	"	(6.0)	2.0	3.0	—	—	黄椿・7.5YR 7/8	"
								"	
21	"	"	6.7	2.0	3.3	—	—	明黄椿・10YR 7/6	"
								"	

第2表 出土土器法量表2

〔()は復元及び残存値〕

掲出 番号	種別	器種	法量(cm)				外 内	色調	調査年次 出土地区
			口徑	器高	底径	高台高			
22	上部質土器	小皿	(7.2)	1.7	(2.8)	—	橙・7.5YR 7/6	1次 詰	
			—	—	—	—	“		
23	“	“	6.4	1.5	4.4	—	浅黄橙・10YR 8/3	3次 詰	
			—	—	—	—	“		
24	“	杯	(10.5)	3.0	(4.6)	—	橙・7.5YR 6/6	1次 二ノ段	
			—	—	—	—	“		
25	“	“	9.9	3.1	4.3	—	浅黄橙・7.5YR 8/3	2次 詰	
			—	—	—	—	“		
26	“	“	(9.6)	2.8	(5.0)	—	橙・5YR 7/4	1次 二ノ段	
			—	—	—	—	“		
27	“	“	12.6	3.9	4.2	—	にぶい褐・7.5YR 6/4	2次 詰(P3)	
			—	—	—	—	“		
28	“	“	(12.4)	3.8	(5.6)	—	橙・7.5YR 6/8	1次 詰	
			—	—	—	—	“		
29	“	“	(11.1)	4.3	(4.2)	—	黄橙・7.5YR 7/8	“	
			—	—	—	—	“		
30	“	“	11.2	3.4	4.6	—	橙・7.5YR 7/6	2次 詰(P2)	
			—	—	—	—	黄橙・7.5YR 7/8		
31	“	“	(12.2)	4.1	5.0	—	橙・7.5YR 7/6	1次 詰	
			—	—	—	—	“		
32	“	“	(11.7)	3.8	(6.0)	—	橙・5YR 6/6	“	
			—	—	—	—	“		
33	“	“	12.1	4.0	4.0	—	橙・7.5YR 6/6	2次 詰(P3)	
			—	—	—	—	“		
34	“	“	12.5	3.9	4.4	—	にぶい黄橙・10YR 7/4	“	
			—	—	—	—	“		
35	“	“	11.9	4.1	4.2	—	橙・7.5YR 7/6	“	
			—	—	—	—	“		
36	“	“	(11.8)	(4.15)	4.25	—	橙・7.5YR 7/6	2次 詰	
			—	—	—	—	“		
37	“	“	11.7	3.8	4.5	—	橙・7.5YR 6/7	2次 詰(P3)	
			—	—	—	—	“		
38	“	“	11.1	3.6	4.4	—	橙・7.5YR 7/6	3次 詰	
			—	—	—	—	橙・7.5YR 6/6		
39	“	“	—	(2.6)	4.5	—	淡黄橙・7.5YR 8/4	2次 詰	
			—	—	—	—	“		
40	“	“	(14.0)	(3.1)	(5.0)	—	にぶい橙・7.5YR 7/6	“	
			—	—	—	—	橙・7.5YR 7/6		
41	“	“	—	(1.6)	4.2	—	捲・7.5YR 7/4	3次 三ノ段	
			—	—	—	—	“		
42	青磁	碗	—	(5.6)	4.6	0.8	灰褐色・5YR 6/2	“	
	青磁	碗	—	—	—	—	明赤褐・2.5YR 5/8		

第2表 出土土器法量表3 (（ ）は復元及び残存値)

番号 番号	種別	器種	法量(cm)				外 内 面	色調	調査年次 出土地区
			口径	器高	底径	高台高			
43	青磁	碗	—	—	—	—	灰白・2.5Y 7/1 オリーブ灰・10Y 6/2	3次 詰	
44	"	"	13.7	(3.3)	—	—	オリーブ灰・10Y 6/2 灰白・10Y 8/1	1次 二ノ段	
45	"	"	(15.2)	(4.2)	—	—	オリーブ灰・5GY 6/1 灰・10Y 5/1	3次 詰	
46	"	"	14.0	(4.1)	—	—	オリーブ灰・10Y 6/2 灰白・10Y 8/1	1次 詰	
47	"	瓈花皿	(14.1)	(2.3)	—	—	緑灰・7.5GY 6/1 にぶい黄橙・10YR 6/3	2次 詰	
48	"	"	11.2	(2.2)	—	—	オリーブ灰・10Y 4/2 にぶい黄橙・10YR 6/3	"	
49	"	"	15.1	(3.0)	—	—	オリーブ灰・10Y 6/2 にぶい黄橙・10YR 6/3	1次 詰	
50	"	盤	—	(1.5)	9.2	0.7	にぶい黄・2.5Y 6/3 にぶい黄橙・10YR 7/4	3次 三ノ段	
51	"	"	—	(3.5)	(8.6)	0.6	オリーブ灰・10Y 6/2 灰白・10Y 7/1	2次 詰	
52	"	"	—	—	—	—	オリーブ灰・10Y 6/2 灰白・10Y 7/1	"	
53	白磁	杯	—	(1.4)	3.2	0.6	灰白・2.5Y 8/1 "	"	
54	染付	皿	—	(2.1)	8.2	0.5	明綠灰・10GY 8/1 灰白・2.5GY 8/1	3次 詰	
55	"	"	—	(1.1)	6.8	0.4	灰白・2.5GY 8/1 "	1次 詰	
56	"	"	15.6	(3.5)	—	—	灰白・2.5GY 8/1 "	1次 詰	
57	"	"	10.2	2.7	5.8	0.4	灰白・7.5Y 8/1 明綠灰・2.5GY 8/1	2次 詰	
58	"	"	—	(1.0)	5.2	0.4	灰白・2.5GY 8/1 淡黃・2.5Y 8/3	"	
59	"	"	16.6	(2.8)	—	—	灰白・2.5GY 8/1 "	1次 詰	
60	"	"	13.3	(2.0)	—	—	にぶい黄橙・10YR 7/3 灰白・5Y 8/2	2次 詰	
61	"	"	(11.6)	(2.15)	—	—	灰白・5Y 8/2 黃褐・2.5Y 5/3	"	
62	"	"	(12.4)	(1.6)	—	—	灰白・2.5GY 8/1 明綠・5G 7/1	"	
63	"	"	16.3	3.6	8.8	0.7	明綠灰・10GY 8/1 灰白・7.5Y 8/1	2次 詰下段	

第2表 出土土器法量表4

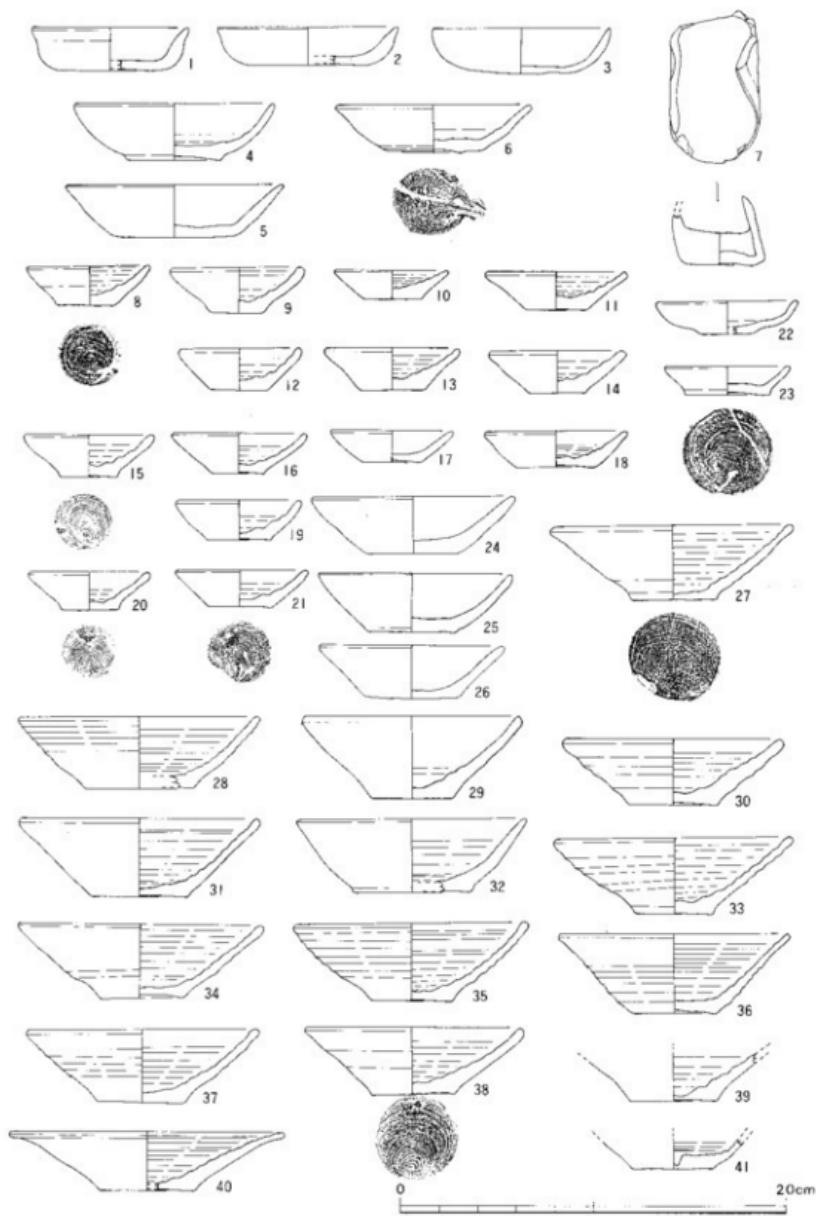
〔()は復元及び残存値〕

拂図 番号	種別	器種	法量(cm)				外 色	調査年次 出土地区
			口径	器高	底径	高台高		
64	染付	皿	(9.0)	(2.3)	—	0.3	明緑灰・10GY 8/1 灰白・5Y 8/2	1次 詰
65	"	"	12.4	(3.0)	—	—	乳白 明緑灰・10GY 8/1	2次 詰
66	"	"	—	(1.6)	7.1	0.4	灰白・2.5GY 8/1 "	1次 詰
67	"	"	(1.4)	—	10.4	0.7	明緑灰・7.5GY 8/1 灰白・N 8/	"
68	"	"	—	(1.5)	9.6	0.7	灰白・2.5GY 8/1 灰白・N 8/	"
69	"	碗	(16.9)	(5.9)	—	—	灰白・2.5GY 8/1 明緑灰・10GY	2次 詰下段
70	"	"	12.6	(2.1)	—	—	明緑灰・5G 7/1 灰白	2次 詰
71	"	"	—	(5.3)	—	—	灰白・5Y 8/1 浅黄・2.5Y 7/3	"
72	窓戸・ 关瀬系	天日茶碗	11.0	(3.7)	—	—	黒・N 2/ 灰白・7.5Y 8/1	1次 詰
73	備前	壺	(11.1)	(6.4)	—	—	黄灰・2.5Y 6/1 暗灰黄・2.5Y 4/2	"
74	"	"	(5.3)	(5.9)	—	—	にぶい黄褐・10YR 5/3 "	2次 詰
75	"	甕	54.5	5.4	—	—	にぶい赤褐・5YR 5/3 灰黄褐・10YR 4/2	"
76	"	"	—	—	—	—	橙・2.5YR 6/6 にぶい赤褐・2.5YR 5/3	3次 詰
77	"	"	—	(12.8)	—	—	暗赤褐・2.5R 3/2 "	"
78	"	"	35	(7.4)	—	—	灰赤・2.5YR 4/2 "	1次 二ノ段
79	产地不明 陶器	"	—	(6.4)	(16.7)	—	黄灰・2.5Y 4/1 暗灰黄・2.5Y 5/2	"
80	"	"	—	(8.2)	(10.8)	—	灰・5YR 5/1 "	2次 詰
81	備前	攢鉢	29.0	(6.4)	—	—	淡黄・2.5Y 7/3 にぶい黄橙・10YR 6/3	1次 詰
82	"	"	35.0	(7.5)	—	—	にぶい褐・7.5YR 5/4 にぶい赤褐・5YR 5/3	"
83	"	壺	(28.2)	(5.1)	—	—	暗赤褐・2.5YR 3/3 灰褐・5YR 6/2	3次 掘切
84	瓦質土器	火鉢	—	(6.8)	—	—	黄灰・2.5Y 4/1 灰黄・2.5Y 7/2	3次 詰

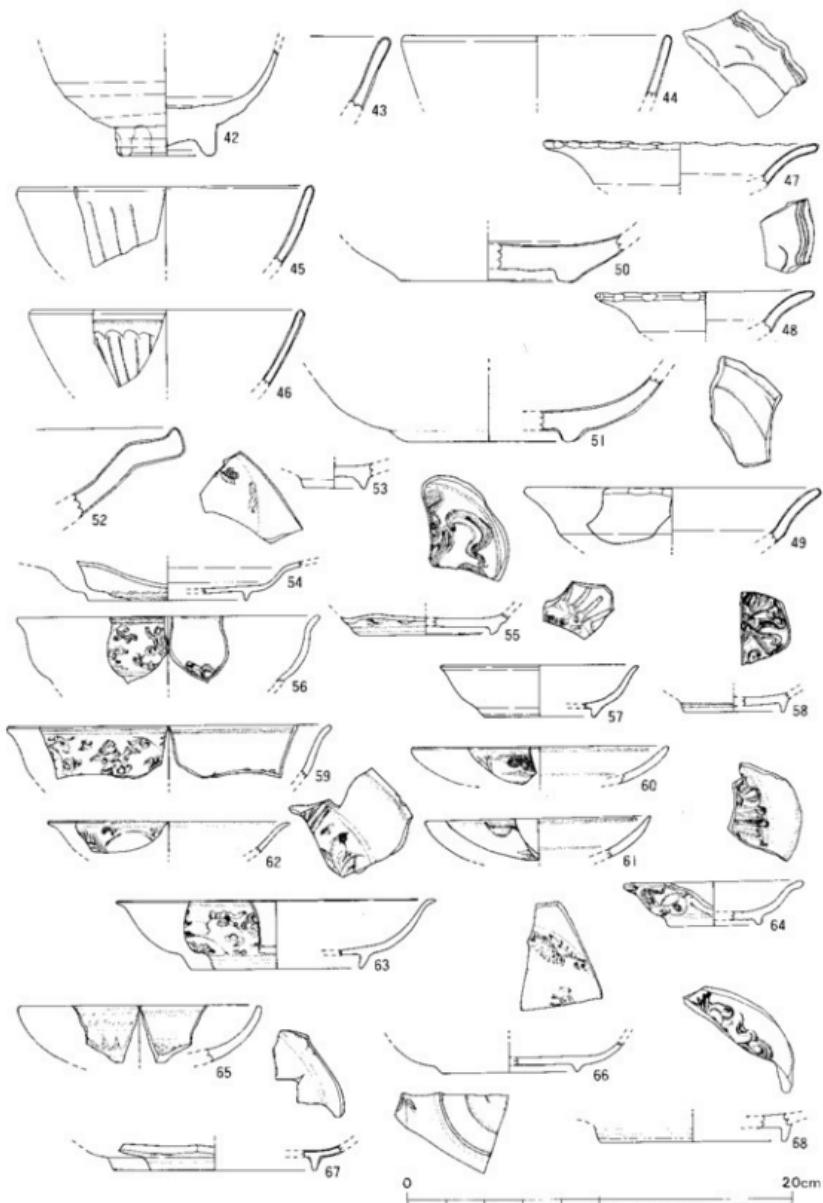
第2表 出土土器法量表5 [()は復元及び残存値]

掲図 番号	種別	器種	法量(cm)				外 内	色調	調査年次 出土地区
			口 径	器 高	底 径	高台高			
85	瓦質土器	鉢	(26.0)	(8.7)	—	—	灰・7.5Y 4/1 にぶい黄橙・10YR 7/4	3次 三ノ段	
87	土鍤	—	4.0	1.5	0.5	8.4	橙・7.5YR 7/6	1次 詰	
88	"	—	3.9	1.6	0.5	10.3	にぶい橙・7.5YR 6/4	2次 詰	
89	"	—	4.1	1.5	0.5	8.1	橙・7.5YR 6/6	1次 詰	
90	"	—	4.0	1.55	0.5	9.8	赤褐・10R 5/4	2次 詰	
91	"	—	4.0	1.3	0.4	5.1	にぶい橙・5YR 7/4	1次 詰	
92	"	—	4.1	1.6	0.5	1.5	橙・5YR 6/6	3次 堀切	
93	"	—	3.9	1.8	0.4	11.7	橙・7.5YR 7/6	1次 詰	
94	"	—	4.9	1.6	0.4	10.9	にぶい橙・7.5YR 6/4	3次 詰	
95	"	—	5.0	1.4	0.4	10.4	にぶい黄褐・10YR 5/4	2次 詰	
96	"	—	4.6	1.3	0.4	6.0	にぶい黄橙・10YR 7/4	1次 詰	
97	"	—	4.5	1.55	0.5	1.2	にぶい黄橙・10YR 7/4	3次 堀切	
98	"	—	4.6	1.8	0.7	1.5	橙・2.5YR 6/6	"	
99	"	—	4.4	1.6	0.55	1.2	橙・2.5YR 6/6	"	
100	"	—	4.4	1.6	0.6	10.1	赤褐・2.5YR 4/6	2次 詰	
101	"	—	3.8	1.5	0.5	8.6	橙・5YR 7/6	1次 詰	
102	"	—	3.6	1.6	0.5	7.9	にぶい褐・7.5YR 5/4	2次 詰	
103	"	—	4.4	2.0	0.4	14.1	褐・7.5YR 4/3	"	
104	"	—	4.4	1.7	0.7	1.3	褐・7.5YR 4/3	3次 堀切	
105	"	—	4.2	1.45	0.55	1.2	褐・7.5YR 4/3	"	
114	火鉢	—	4.16	(10.5)	—	—	橙・7.5YR 7/6 "	2次 詰	

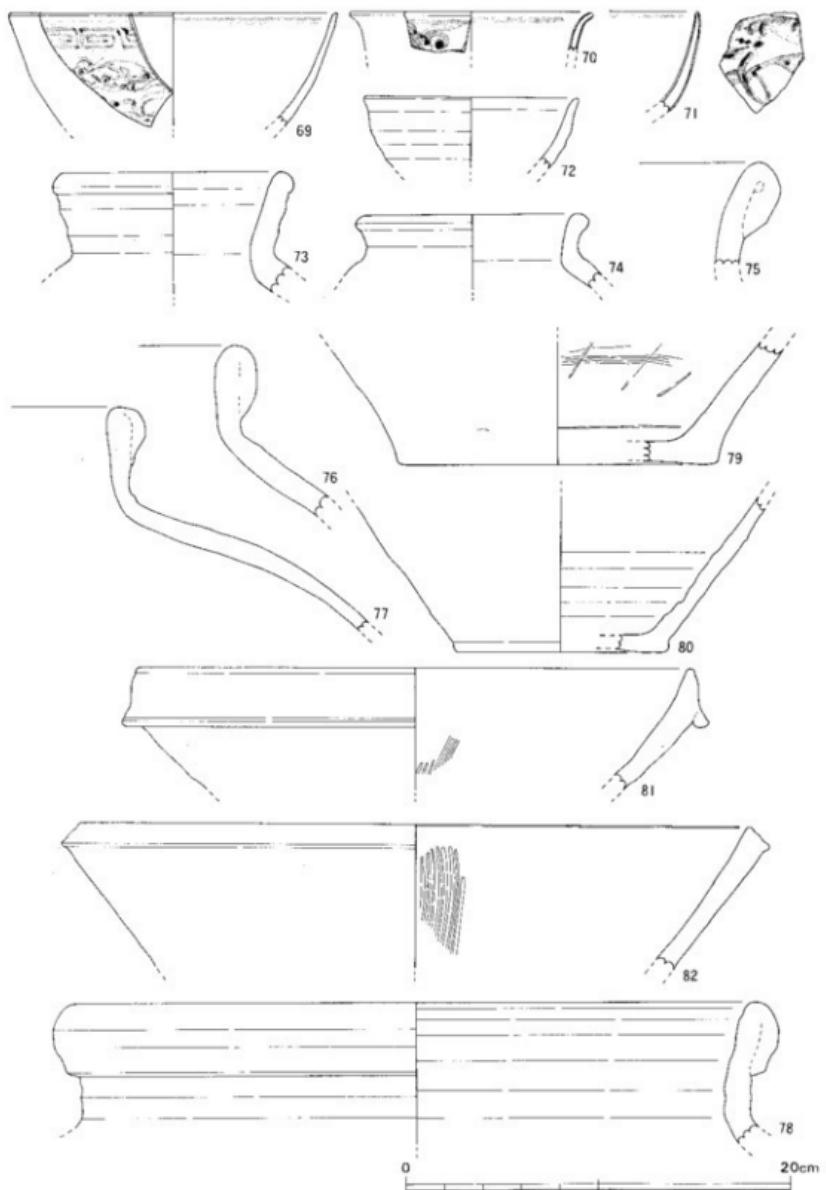
〔土鍤は、長さ・幅・孔径・重量〕



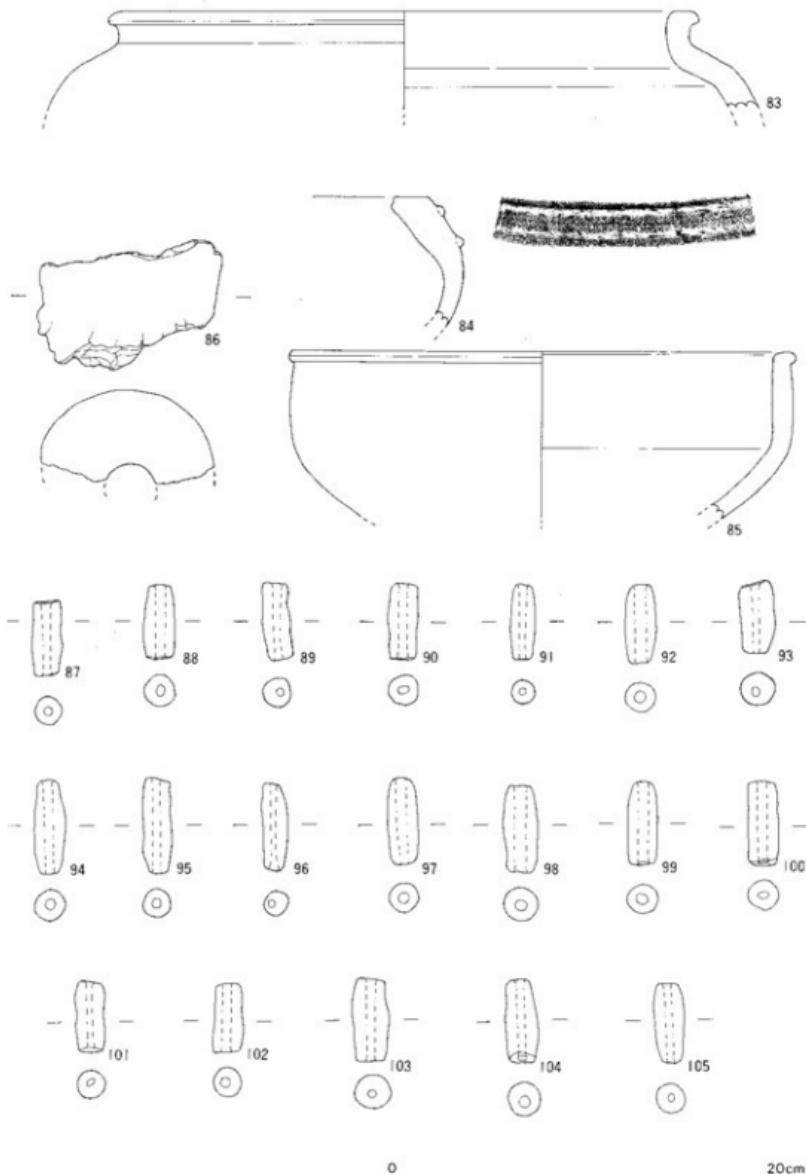
第13図 出土遺物実測図 1



第14図 出土遺物実測図 2



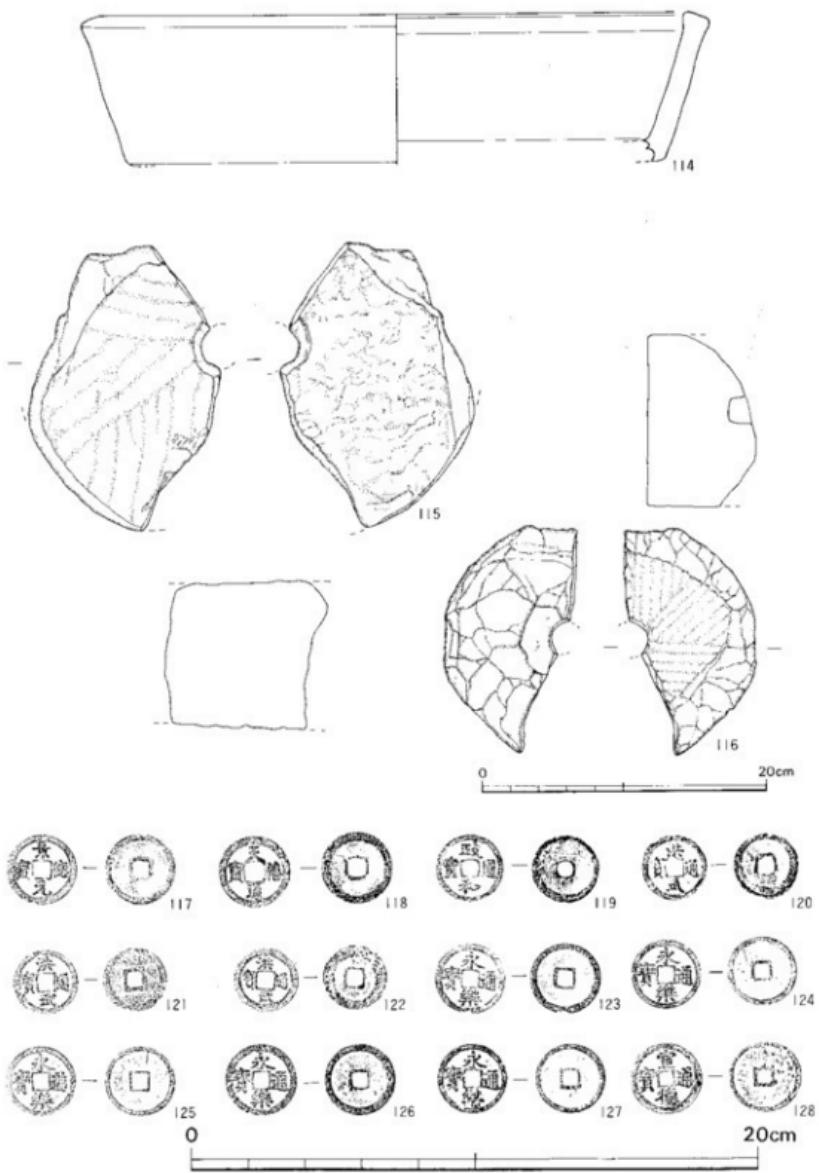
第15図 出土遺物実測図 3



第16図 出土遺物実測図4



第17図 出土遺物実測図 5



第18図 出土遺物実測図 6

写真図版



岡豊城跡航空写真

図版2



岡豊城跡遠景（南より）



岡豊城跡近景（南東より）



詰（A区）調査前全景（北より）



詰（A区）石敷遺構（SxI）検出状態

図版4



誌（A区）全景（北東より）



誌（A区）切石、土壘（北東より）

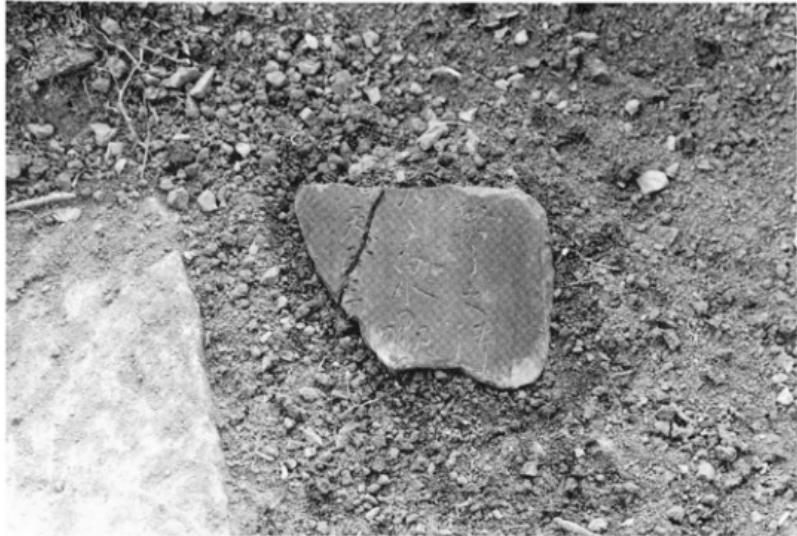


詰（A区）SX1、切石（西より）



詰（A区）P1遺物出土状態

図版6



詰（A区）刻銘瓦出土状態



詰（A区）茶臼出土状態



詰（B区）全景（南西より）



二ノ段（C区）調査前全景（西より）

図版 8



二ノ段（C区）全景（西より）



二ノ段（C区）南壁セクション（北西より）



詰（D区）調査前全景（南西より）

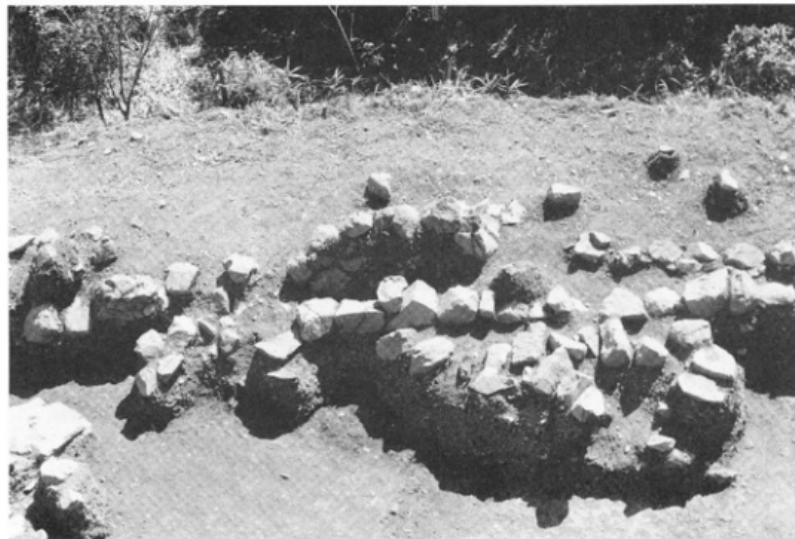


詰（D区）SB1全景（南西より）

図版10



詰（E区）全景（北より）



詰（E区）土壠石列



詰 (F区) 全景 (北西より)



詰 (F区) 西壁セクション (北東より)

図版12



詰下段（G区）SB3検出状態



詰下段（G区）SB3（南西より）



詰下段（G区）SB3東辺礎石（南西より）



詰下段（G区）SB3西辺礎石（北より）



詰下段（G区）SK2（南西より）



詰下段（G区）段状構、岩盤整形面（北東より）



詰（H区）調査前全景（北西より）



詰（H区）全景（北西より）

図版16



詰（H区）SK1（南東より）



詰（H区）SK1遺物出土状態



詰（H区）SD2、石列（北西より）

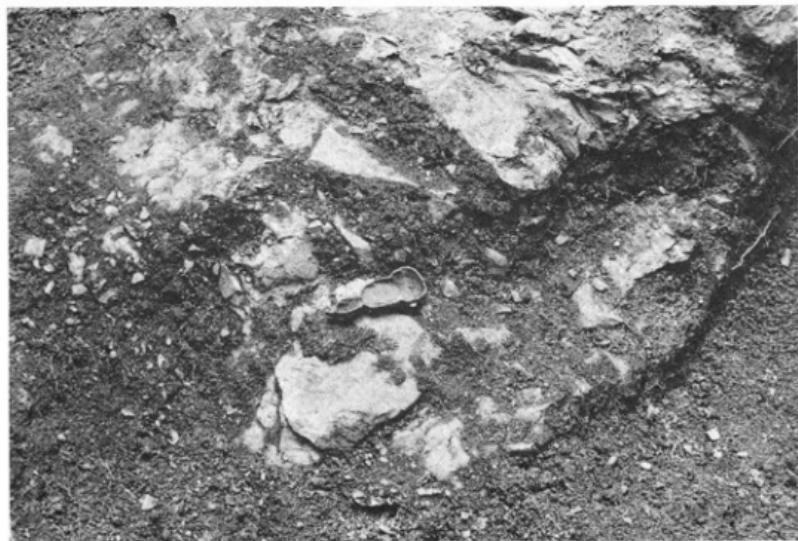


詰（H区）SD2（北東より）

図版18



詰（H区）SD 2遺物出土状態



詰（H区）石列据部遺物出土状態



誌（I区）SDI（東より）



誌（J区）全景（南西より）



三ノ段（K・L区）調査前全景（北東より）



三ノ段（K区）上面全景（北東より）



三ノ段（L区）上面全景（南西より）



三ノ段（K区）下層割石棟出状態（南西より）

図版22



三ノ段（K区）全景（南西より）



三ノ段（K区）遺物出土状態



堀切（M区）調査前全景（北より）



堀切（M区）下部調査前全景（北東より）

図版24



堀切（M区）下部全景（北東より）



堀切（M区）下部全景（南東より）



堀切（M区）下部岩盤整形面



堀切（M区）下部盛土セクション



井戸（M区）全景（北東より）



井戸（M区）北壁

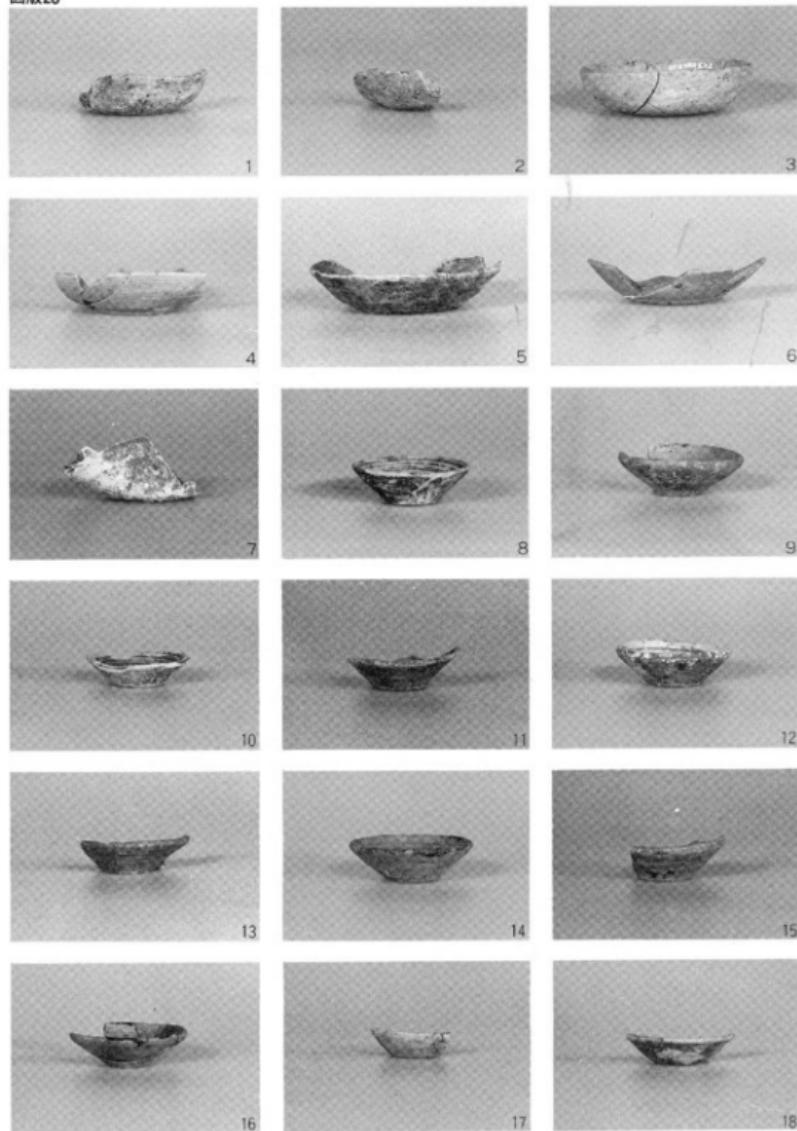


四ノ段南部（北西から）

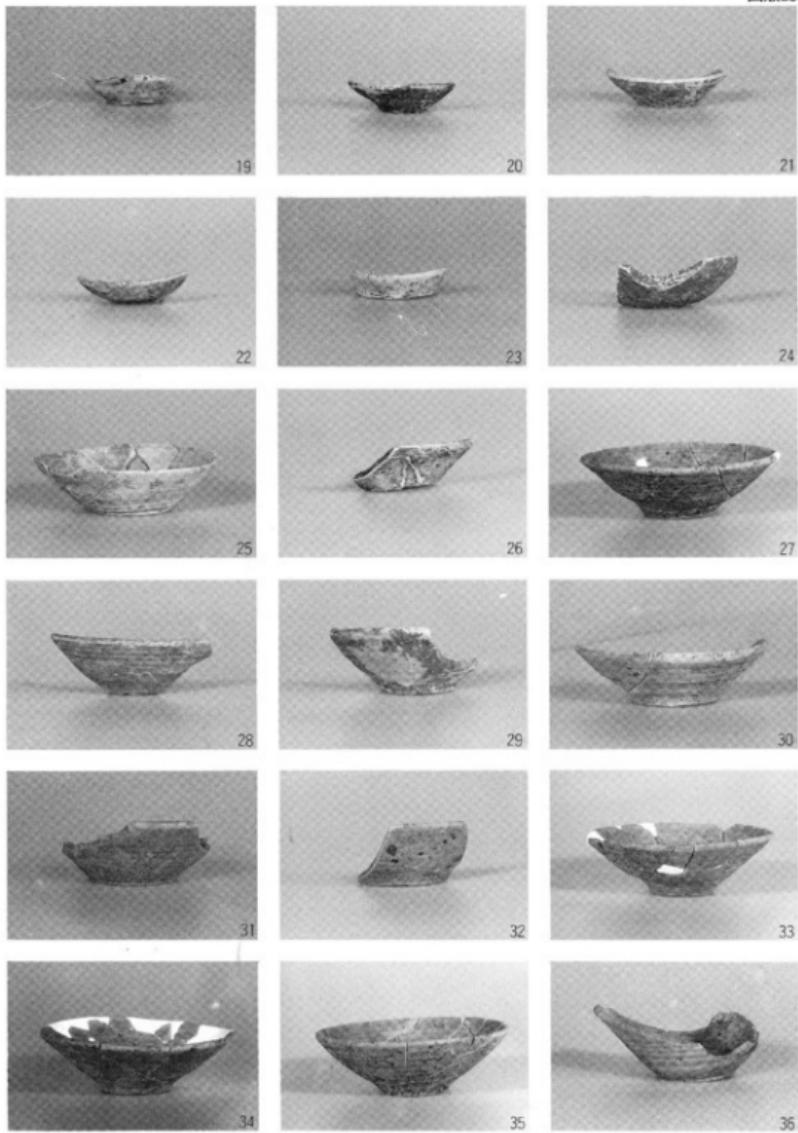


北部堀切（東より）

図版28

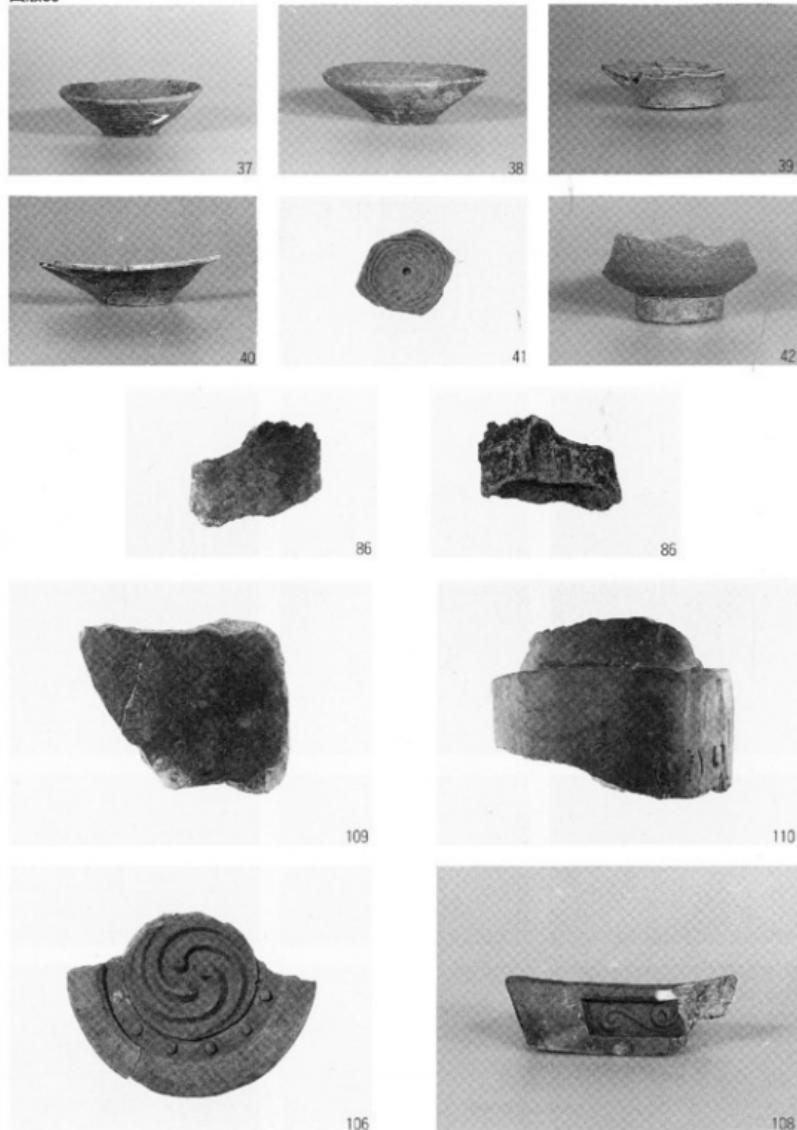


土師質土器



土師質土器

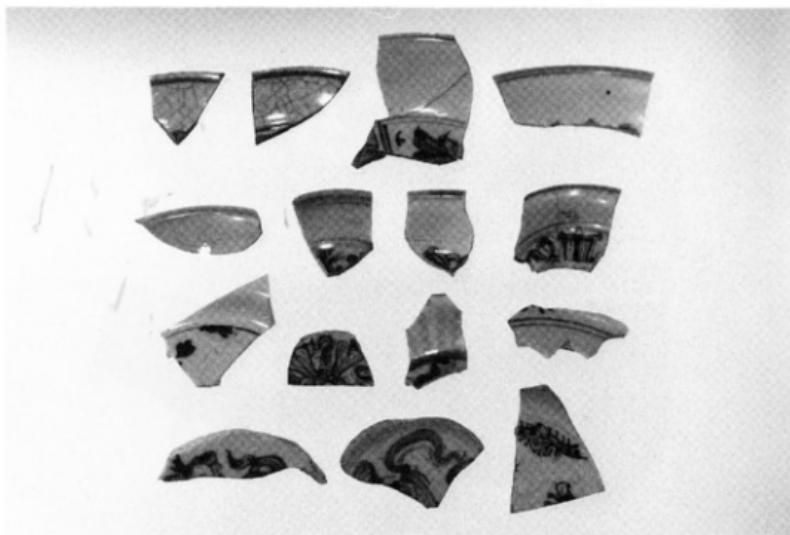
圖版30



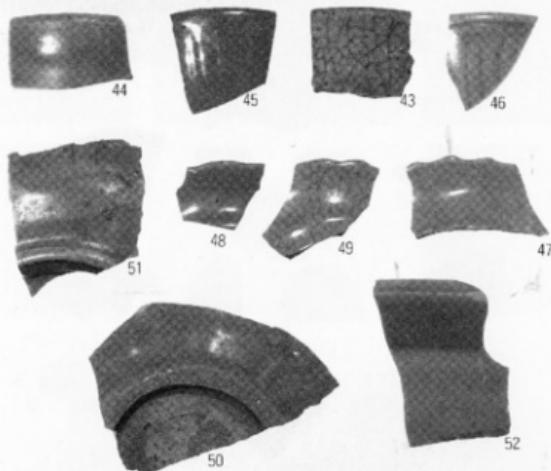
土師質土器(37~41)、青磁(42)、羽口(86)、瓦類(106·108~110)



染付(表)



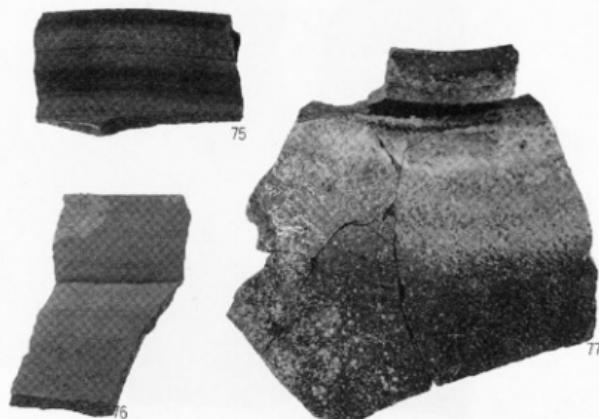
染付(裏)



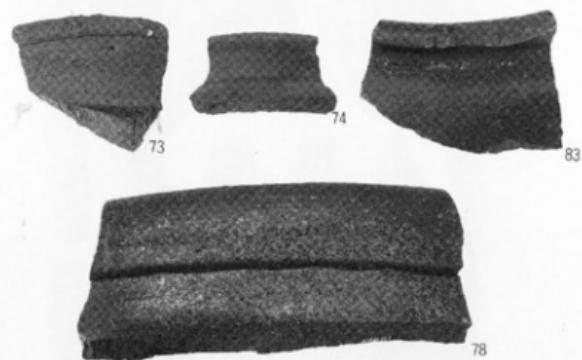
青 磁



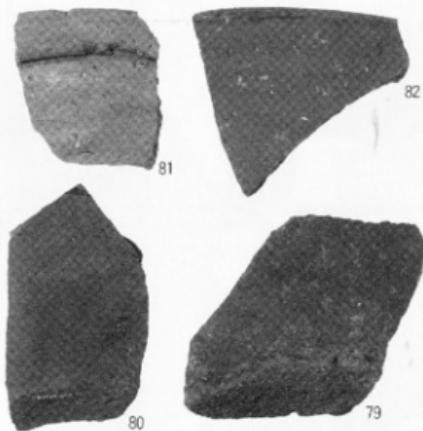
染付(69~71)、天目茶碗(72)、白磁(53)、瓦質土器(84・85)



備 前 燒



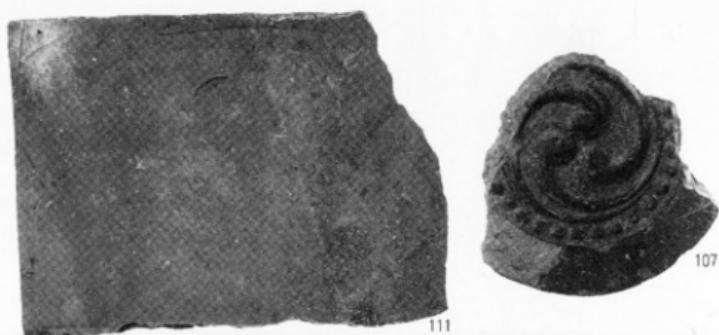
備 前 燒



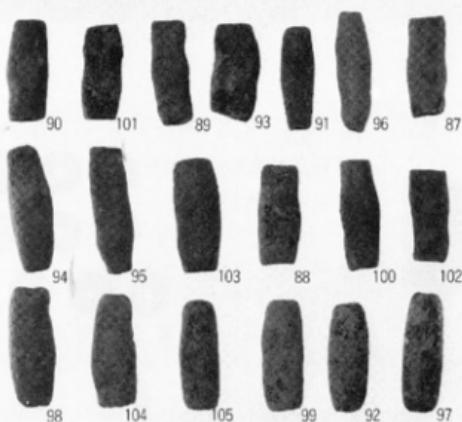
備 前 焼 (表)



備 前 焼 (裏)



瓦類



土錘



113



114



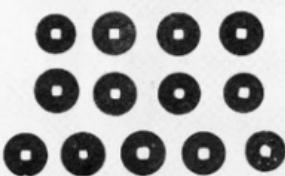
115



116



112



117-128

金銅仏(113)、土師質土器(114)、臼(115-116)、硯(112)、渡來鏡(117-128)

岡豊城跡発掘調査概報

-第1～3次調査概要報告書-

1988年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
高知市丸ノ内1-7-52

印 刷 共 和 印 刷
高知市上町3-4-19

